



W-atelier01■阿部安成、石居人也「あれからずっと、あれから、ずっと—国立療養所大島青松園在住者の顕彰碑をめぐるその後」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.211、2014年6月。

W-atelier02■阿部安成「サミシイオモイ—〈話トリエ〉のなりたちにさかのぼって」同前 No.213、2014年6月。

W-atelier03■本稿

¹ 本稿は、2013-2014年度滋賀大学サバティカル研修制度、2014年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所空間における〈生環境〉をめぐる実証研究」、日本学術振興会2014年度科学研究費基盤研究(C)「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(課題番号26370788、研究代表者石居人也)、福武財団第9回瀬戸内海文化研究・活動助成「ハンセン病療養所に〈話のアトリエ〉を編む」(研究代表者石居)による研究成果の一端である。



わたしたちの工房〈話トリエ〉では、今年 2014 年に創立 100 年をむかえるキリスト教霊交会（以下、霊交会、とする）の歴史を記念するために、7 月から 11 月まで毎月 1 回の連続講演会をおこなうこととした。それを〈話トリエ連〉と名づけた。

霊交会は、5 名の療養者によって、香川県木田郡庵治村の大島にある大島療養所につくられたキリスト教の信徒団体である。会員の数は、おおよそつねに全在園者数の 1 割くらいだと現在の代表から聞いたことがある。多いときでおよそ 80 名前後の会員数となった霊交会は、いま、在園者数 76 名の国立療養所大島青松園で 6 名の信徒が在籍している²。

創立の起源が 20 世紀初頭にまでさかのぼる療養所内の教会は、少ないながらも複数あり、霊交会だけが長い歴史を経てきたわけではない。創立から 100 年のあいだをみても、機関紙『霊交』を発行した時期は、1919 年から 1940 年までと、そのうちの 1/5 ほどの短さとみなされるかもしれない。そうした編集や刊行の活動はすでに停止しているものの、信仰をとおしたつながりは、毎週開かれる聖日礼拝において継がれている。霊交会の 100 年を軸として、大島の療養所とそこで生きた療養者について考えたいとおもった。



連続講演会の企画は、今年 2014 年の 5 月のおわりころから 6 月上旬にはそのかたちが整ってきたようにおもう。5 月 31 日の訪島時に霊交会代表に講演会の相談をした。それからひと月をかけて講演会のプログラムを練り、6 月 25 日に企画案をつくった。7 月から 11 月まで毎月 1 回ずつ、日曜日に大島の霊交会教会堂で講演会をおこなう。講演者 4 名（うちひとりのみ 2 回）の仮題目も決まった。翌 26 日の霊交会代表への電話連絡で、企画案を伝える。当初わたしは園側への連絡は不要と考えていたが、代表が通知することだった。園側への説明が必要であれば、いつでも島にゆくこととした。企画案の文書は、翌 27 日にファックスで霊交会代表に送信した。

7 月 6 日に訪島、霊交会代表に会う。連続講演会について、園側の担当となる福祉室から

² 2014 年 7 月 1 日時点の在園者数は「大島青松園入所者数・年齢別数等概況」（『青松』通巻第 677 号、2014 年 8 月）によった。

とくになにもいわれなかったとのことなので、企画案のとおり実施することと決めた。第 1 回の実施日がせまるなか、連続講演会のフライヤ（後掲）をつくり、その PDF を E メールで添付送信したり、文書を郵送したりして、発信した。フライヤは、滋賀大学環境総合研究センターのホームページにも掲載された。

文書郵送への反応があり、毎日新聞社の記者からの電話取材となった。連続講演会のこと、霊交会のこと、史料のリプリント版のことを話した。記事は、『毎日新聞』大阪本社版 7 月 24 日朝刊 26 面香川に、「大島青松園」テーマに連続講演会」の見出しで掲載された（161.5cm²。署名は馬淵晶子）。すぐに朝日新聞社記者からも連絡があり、『朝日新聞』大阪本社版 7 月 25 日朝刊 31 面香川に、「青松園で連続講演会」の見出し記事が載った（145.06cm²。署名は細川治子）。『朝日新聞』記事には申し込みについての誤記があったが、そのままとした（前々日金曜日の午後 4 時まで、が正しい）。



7 月 24 日朝に講演会実施の確認のため、霊交会代表へ電話する。霊交会信徒のひとりがアキレス腱を切る怪我をしたと聞き、愕然とした。畑仕事で坂をのぼろうとしたところのことと聞いたので、そのときは大島会館わきの宗教地区にのぼる急な坂での怪我かとおもった。のちに、畑でのこととわかる。霊交会教会堂より少し北にいったところに畑がある。そこは人通りが少ない。しばらくのあいだ動けずにじっとしていたというようすに、こころが苦しくなった。夏の島は暑い。

今回の連続講演会では、霊交会にも園側にも手間はかけずに、事前の連絡、会場設営、出席者の誘導などすべてわたしたちでおこなうこととしていたので、霊交会に生じた不測の事態ではあったが、講演会を延期するという判断はしなかった。

この信徒は、畑仕事をなによりのたのしみとしていた。今年の春先は体調がおもわしくなく、40 日間も畑にいけなかったと、とても悔しがっていたようすを覚えている。7 月にはとても艶のよいトマトをたくさんいただいたばかりだった。これまでに、かぼちゃ、分葱、小玉ねぎ、にんにく、夏みかんをいただき、五目寿司、アップルパイもなんどつくっ

てくださった。

7月26日曜日、彼がいない聖日礼拝は、霊交会代表、不在の彼のおつれあい、牧師、わたしの4名だけの、これまででもっともひとが少ない祈りの場だった。お見舞いにかがうと、痛みはないとのことだが、怪我をしてしまったそのことが悔しそうで、畑にいけないことをなにより悔やむようすだった。

これまでとは異なる礼拝を終えた教会堂で、連続講演会の第1回を始めた。



～話トリエ連 01

2014-7-27～

■■■話トリエ連では、講演者にふつごうがなければ、講演内容をそのままこの Working Paper Series で公開することとした。また講演会開始時に出席者には、発言者の氏名を記載せずに、ディスカッションの内容を Working Paper Series の冊子体と WEB 版とで公開することの許諾をもとめている。この講演会第1回では公開に異議はなかった。

ディスカッションのなかでの個人名は、わたしたち話トリエ連主催者以外は、これを「在園者」などに置き換えることとした。話トリエ連の内容を再構成するにあたって、物故者以外の個人名はそのまま記載せず、また発言者については個人名を明示しないだけでなく、発言者を個々に区別しないこととした。

本稿で、【あ】は講演者の阿部を、【出】は出席者を、【信徒】は霊交会信徒をあらわす。たとえば、【あ】の発言内容のなかに記された太ゴシックの部分は、阿部以外の出席者による発言であることをあらわす。発言内容の誤りや補記は、〔 〕内に記した。

以下の講演内容は、滋賀大学経済経営研究所の研究サポートにより文字起こしして掲載した。



【あ】 ではあらためて、はい、きょうはどうもありがとうございます。

【出】 よろしくお願ひします。

【あ】 で、あの、こういう講演会をこの療養所のなかでやるっていうのは、ええ、大

島のばあいにはたぶん初めてだとおもいます。

【出】 ああそうですか。

【あ】 あの一、なんでしょうね。え一、たとえばなんか作家のひとをよんでだとかそういう講演会っていうのはあったかもしれませんが、**そうですね**、そのハンセン病を研究しているひとたちが、それについて、ここで講演会をやるっていうのは、たぶんなかったとおもうんですね。それだけじゃなくてほかの療養所をみても、あの、そこを訪ねている研究者やジャーナリストが、その園のなかで講演会をやるっていうのはあまりなかったんじゃないかとおもいます。そういう意味では、あの一、われわれがおこなおうとしているのは、あのまあ、初めてのというか新しい試みだというふうにおもっています。

で、これをやろうとしたその、きっかけというか、あの、動機というか、そういうのをまずお話ししようとおもうんですけども、えっと、わたしはこの療養所にきだして、ちょうど今年で 10 年になります。2004 年から、あの、通いだして、それでやっぱりこのかんずいぶんいろいろ変わったとおもいます。その変化というのはまた後でもふれますが、島を訪れるひとがだいぶ多くなったというふうにみえます。で、それはいい面もあるし、いくらか悪い面というか危惧する面もあるんじゃないかとおもっています。

で、たとえば最近のその新聞でも、え一、わりと、その、療養所のことが報道されていて、『朝日新聞』で、**高木さん**、えっ一と、〔7 月〕 23 日には、その、天皇、皇后が、え一、ハンセン病元患者と懇談をしたっていう記事がでましたし、**仙台**、その翌日の 24 日の新聞でも高木さんが「記者有論」というところで、「負の記憶しっかり継承を」っていうの書いてるんですね。『朝日新聞』はわりと、あの一、ハンセン病の問題ををとりあげているとおもうんですが、**そうですね**、でも論調が負の記憶、負の遺産、負の歴史なんですね。それはかなり一面しかとりあげていないというふうにはわたしはおもっています。

この「記者有論」のなかでも、平均年齢が高くなっている、いわゆる入所者の数も少なくなっている、で、「国の隔離政策の下、どんな人権侵害を受け、どう生き抜いたか、彼らが直接、語るができなくなる日はそう遠くない」というふうに書いているわけですね。

「入所者自身、そうした危機感を抱き、自らの記憶を「負の遺産」として語り継ごうと、懸命だ」というふうにも書いている。このことはまさに確かにそうだとおもいますし、この10年でわたしも霊交会のひとたちとのかかわりのなかで、霊交会のひとたちが、過去に関心をよせる意識がものすごく強くなっているというのを実感しています。

たとえば、『報知大島』『藻汐草』、それから『霊交』の復刊というのも霊交会の協力なしには実現しなかったわけですし、霊交会の信徒個人をとりあげても、セトゲイのときにあの貯水池の近辺をみずから草を刈って、その、みせようとしている、あるいはこのあたりにある四国四十四か所をかたどった石仏の調査もかなり熱心におやりになっていて、そういう点では、あの、ここに書いてあるとおりと、わたし自身もよく実感しているんです。

ただこの記事は、当事者のこれは「なまの証言」と読むんだろうとおもうんですが、「生の証言」に勝るものはないだろう。残された時間は少ない。いま行かなければ、会えない人がいる。聞けない話がある」というふうには書いてるわけですね。このこと自体も間違いではないとおもうんですが、でも大量に外から押しかけて、当事者の話を聞こうというわけですけども、くるひとたちはそのとき限りかもしれないですし、毎年毎年のローテーションの一環かもしれないですが、迎えるほうはばあいによってはたいへんな量になるわけですね。で、在園者も今年の夏いつもの夏とおなじようですけども、また、あの、たくさんお客さんがやってくるとおっしゃっているわけですが、あの、当事者たちというのは、わたしは語る義務はないとおもっています。で、だけれども、この記事にもあるように、その当事者ならではのことを聞かなければいけないということで、たくさんひとが押し寄せてきてそこで語らせるというのは、なんか傍からみると拷問に近いような感じもしちゃうんですね。

で、そんなようすをみるにつけ、もちろん当事者が話す話にある力というのはあるわけですけども、それだけじゃなくて、あの、そこを調査しているひとにもなにかできることがあるだろう。で、わたしはそうしたようすをみるにつけ、もっといろいろな話し手が

いてもいいだろうし、聞き手もいろいろであっていいだろうから、できるだけそういういろいろな話し手や聞き手がかかわれる場を設けたい、というふうに感じてこういう講演会を始めたというところがあります。

で、ただ、わたし自身 1 つ気をつけたいとおもっているのは、まああの、過酷なスケジュールが気の毒だっていうのがあるにしても、でもわたしは当事者の代弁者だとはおもっていないということです。そこのところははっきりと区別して、わたしはなにか当事者になりかわって療養所のようすを伝える、療養者のその生活を伝えるのではなくて、もちろんわたしがそれは観察をし、調査をし、考えたもの、それをあくまで話すんだというところははっきりさせておこうと考えています。

で、そういうようなそのまあ、動機やきっかけがあって、この連続講演会を始めたわけですが、しかもきょうは第 1 回で、どういう順序でやっていこうかっていうのもそんなに充分には考えてなくて、その一、きたひとにあわせようというふうにはおもってたんですが、だいたい、まああの、2 時間、きょうお帰りの便は何時に？、**やあぼくはもう何時でもかまいませんよ。はい。**そうですか、でも 1 時半の予定をしていたとしてもまあだいたいこのディスカッションを 1 時間くらい、で、さきほど神社のほうへ行ってらっしゃらなかったということなんで、あの一、お天気があんまりくずれなければ、あの一、ここからそう遠くないところにある大島神社と、それから、あの、南の皇子神社と歩いてみようかとおもっています。

で、えっと、きょうは、その、内容としては「療養所の外へ、島の外へ」というタイトルをつけました、で、えっと、大きく中身は 3 つになるんですけども、「はじめに」のところ、その、大島青松園を知るための記録にどういうものがあるのかを簡単に説明をして、そのうえできょうの話の中心は 3 にあるとおり、今年の 5 月におこなわれた創設者のひとり三宅官之治の墓前礼拝、これを軸に話していこうとおもっています。

で、タイトルに籠めた、その一、わたしのねらいというのは、あのまあ、1 のところでも話すんですが、療養所のイメージ、あるいはそこで生きてきた療養者たちのイメージとい

series 話トリ工 03*W-atelier03*

うのがもうかなり固まっているものがあるわけですが、わたしはそれをできるだけつくり直したいとおもっています。で、そのときのキーワードとして、きょうはここにあるように「外へ」という言葉を掲げたのですが、掲げてみました。それを話していこうとおもいます。

で、最初の「はじめに」のところですが、この大島青松園を知るための記録にどのようなものがあるのかということなのですが、えー、まず最初に療養所がつくったものを取りあげましたが、これはなにもそれがいいというわけでとりあげたわけではないんですけれども、ただ、その、一定の期間をおいてつくっていて、しかもかなり古くからつくられている、というのが参照すべき史料かとおもっています。で、これはいわゆる創立記念誌というものなのですが、大島のばあいにはまだ青松園になるまえの大島療養所の時代に創立から 25 年経ったことを記念して 1 冊つくられています。で、それからは、50 年、60 年、70 年、80 年、90 年、100 年というように 10 年おきにつくられていて、この創立記念誌というのは全部で 7 冊になります。

ただこれはけっこうびっくりすることかとおもうんですけれども、この 7 冊がすべてそろっているところっていうのを、わたしはみたことがないです。国会図書館にもそろっていないですし、高松の県立図書館や市立図書館にもないんですね。で、東京のハンセン病資料館にもないんです。で、もしかすると青松園の園長の部屋にはあるのかもしれないんですけれども、全部そろっていないというおかしな特徴があります。

で、えっと、おととい高松の市立図書館にいて、あらためてこの 25 年史をみたんですが、あの図書館によっても、どの版を持っているかっていうのが違うばあいがあるんで、高松のはちょっと驚いたのは、こうした地図が折りこまれていました [地図のコピーを提示]。で、折りこまれていたといってもこれ、貼りつけて折りこまれていたんじゃないんで、まあもともとはそうかもしれないんですが、いま高松の図書館にあるのは離れちゃっているんで、閲覧していくなかでなくなっちゃう可能性もあるという心配をしているんですが、あのこういう地図が入っていて「大島療養所配置図／昭和九年十二月末現在」というのが

あります。で、はっきり確認はしていないんですが、大島の地図としてはかなり古いもの、あるものとしては古いものじゃないかとおもっています。

で、『藻汐草』の通巻第 16 号だったかにも、地図が挿絵として載ってるんですが、たぶんこれと同じものだとおもいます。これみてなかなか面白いのは、もう霊交会はあるんですね。で、キリスト教の教会と金光教と、それから天理教、そして大師堂がある、で、だいたいいまの納骨堂と同じ位置に納骨塔になっていて、たぶんこれいまあそこにある、えーいちばん左側の碑があるわけですが、あれじゃないかとおもうんですね。それから、えっと、いわゆる患者地帯と職員地帯を分ける境界線があったっていうのも、はっきりとこれ記されています。**鉄条網が引かれてた**。ええ。

それから、えっと、大島というと解剖台っていうことになるんですが、解剖室があったのもはっきりと記されています。で、昨日も在園者とこれみながらいろいろ話したんですが、このときとの方が来た当初と変わっていないところもあれば、まあ、かわったところもあるっていうんで、ただだいぶ似通ったようなところもあるようでした。**監房は載っていますか**。ええーとここに載って、あの、「監置室」という名称になっているんですが、しかも精神病患者とそうでないひとたちを分ける監置室が 2 つあって、境界線のやっぱり内側になるわけですね。

で、まあこういう地図があらためてあるっていうのがわかったりして、そういう点で園の創立記念誌っていうのは便利なところもあるばあいがあります。

で、それがあの、7 冊あるんですが、おおよそこれらのつくりというのは、単純なつくりになっていて、園が、まあ、どれだけの設備を備えているのかっていうのを誇るようなそういうところがあります。あるいは医者たちの業績を披露するといったようなそういう性格があるわけですが、年を経るにつれてだんだんと、その、在園者の書いてるものも増えていって、自治会が書いたりとかそういうものも増えていくような傾向があります。

それから自治会の歴史書としては、創立 50 年を記念して 1981 年に『閉ざされた島の昭和史』というのが編まれています。ええーで、さきほどいったその、1 つの固まった療養所

像というのがこの書名にもあらわれているわけですが、まあ「閉ざされた島」というわけですね。で、長島愛生園の自治会のやはり創立 50 年史は、「隔絶の里程」、「隔てる」、それからまあ「絶える」の隔絶、「里程」は「さと」と「のぎへんに口と王の程」という字なんですけど、まあそれだけ隔てられている、あるいは閉ざされている、こういったイメージが療養者自身が強く持っていたというのはそのとおりなんだろうとおもいます。

で、彼ら彼女たちが、自分たちの歴史をあらわそうとするとときに、そうしたイメージをこう表明していくのもそのとおりなんだろうとおもうんですが、そうではないわれわれが、療養所を考えるとときに、そうした療養者がもっているイメージをただなぞるだけでいいのかどうか、ということは強く、あの、わたしは考えるべきだとおもっています。

それから、大島のばあいには、自治会、自治組織とほぼ同じ時期に盲人会もできて、盲人会がやはり 50 年史を 84 年に、『私はここに生きた』というタイトルで刊行しています。

で、この自治会、盲人会ができた 1930 年代初頭をふりかってみると、そのときには婦人会というのもできているわけです。これはどうも男たちの声につきうごかされて、女たちも自分たちの組織をつくろうとして結成されたようなんですが、そして結成された当初の規程はいくつか残っているんですが、どうも女性たちは機関誌をだしたり、あるいはその、組織が存続していった何年史をだすというようなそれほどの活動にはいたらなかったようです。

それから大島でも聞き取りというのはおこわれていて、代表するものとしては 2 つあって、1 つが活版の、活字の、『青松』にだいたい 1993 年から 2003 年のほぼ 10 年間、断続的に連載されてきた「聞き書き それぞれの自分史」というのがあります。で、これ 10 年断続的に数十人の声が拾いあげられています。で、これは療養者自身が、あの、自分たちの自分史を、その、残そうとして、おこなったものになります。

それからもう 1 つは、ええー、この連載が終わった時期と重なるんですが、香川県がおこなった聞き取りで『島に生きて』というのが上下 2 冊ででています。で、これ両者あわせると、もちろんそこには重なるひとたちもいるんですが、かなり膨大な量の聞き取りの

記録になるとおもいます。

ちょっと余計なことをいうと、1つびっくりしたことがあって、以前ここにたまたまいるときに、香川県の博物館の方がここに調査にきてたわけなんです、えー、この県が刊行している聞き取り集のことを知らないわけですね。で、これはあの、たぶん公立の図書館にはあるでしょうけれども、あの、こういうのを知らない県の職員もいるっていう、それくらいの認知度なんだっていうところのあらわれといってもいいかもしれません。

それから史料集としては、ええー、かつて藤野豊さんが不二出版からだした、ハンセン病問題の資料集、あのなかにも大島のものはいくつかりあげられていますが、わたしたちがおこなった、大島でだされたものをとにかくすべてだそうという史料集はこれらが始まりになります。おとしに『報知大島』をだして、今年『藻汐草』をだしました。で、今年が霊交会 100 年の記念の年でもありますので、その 100 周年にあわせて、『霊交』をもう 1 回だそうとおもっていますし、以下手書きの『青松』等々もだしていく予定になっています。で、さきほどもいいましたように、このリプリントの特徴というのは、残っている『報知大島』や、残っている『藻汐草』のすべてをだそうというものになります。

で、『報知大島』は残念ながら最後がいつなのかがわからないんですけども、とにかくあるもの、この教会にあったものと自治会の倉庫にあったものとそれらをすべて掲載しました。それから『藻汐草』はこのリプリントをつくっていくなかであらためてわかったんですが、えー、大島には、えーっと、療養所の創立 50 年を記念して残っている『藻汐草』を全部製本して保存用にしたんでしょうけれども、それがすべてなんだとおもっていたんですが、最終号がそこになかったんですね。で、それが、えー、原本は長島の愛生園にあったのがわかって、それをこのリプリントシリーズには収録をしています。

で、これだけ、その、大島について知る手がかりがあるわけなんです、ではその療養所というのはこれまでどういうふうを受けとめられてきたのかを、簡単につぎに述べようとおもいます。

さきほどもいいましたけれども、「隔絶の閉ざされた療養所」、こういうイメージが強い

だろうとおもいます。で、こういう強いイメージが残されたのはやはりなんといっても、1909年から96年まで続いた隔離予防法体制、これの大きな強い力が療養所のイメージを定めているところがあるとおもいます。で、ひとまずこの隔離予防法体制というのを予防法のいちばん始まりになる「癩予防ニ関スル件」、それがつくられ、そして、その、「らい予防法」が廃止される法律がだされる、それまでの期間を区切ったわけですけれども、しかし法律が廃止されたからといって、この隔離予防法体制がすっかりなくなった、とはいえないだろうとおもっています。ですから、1909年から96年というのは、ひとまずの期間でしかすぎないわけですが、まあ、ともかくこの期間は法律が機能している、そしてそれによって隔離されなければならない、そうした時代がおおよそ90年続いたなかで、療養所のイメージが、くりかえせば、隔離の隔絶の閉ざされた場所なんだ、そういうふうにみなされるようになってきたところがあるとおもいます。

で、予防法が廃止され国家賠償請求訴訟で原告勝訴となり、そしてまた国がその政策の誤りを認める、そしてハンセン病問題に関する検証会議が全療養所を調査するようになる、そんなふうには、その、90年代の後半から2000年代にかけてハンセン病療養所をめぐるようすというのはかなり大きく変わってきたわけです。で、そうした変化を経ながら、あるいは変化を経てなお、といったほうがいいかもしれませんが、療養所あるいは療養者の歴史がどのように記されてきたのか、それはやっぱり1つのはっきりとしたストーリーがあったとおもいます。で、そのストーリーというのは、抑圧と差別があつて、で、それに対する療養者の抵抗と闘争があつたんだ、こういう1つのはっきりとしたストーリーでハンセン病の歴史を記す、という型ができあがった、とおもいます。

で、ただそうしたなかでも文芸と宗教が注目されたり、あるいは少し関心を寄せられたりなんていう時期があつたといつていいとおもいます。で、この文芸と宗教というのは、自治会が編んだ『閉ざされた島の昭和史』にも、はっきりと一定のページ数をもって記されているところになります。で、かつての療養所における、その、文芸と宗教の役割や意味というのがどのようにとらえられてきたのか、予防法が機能していた同時代には、1つは

やはりこれは慰安のためである。そして療養所の側からすると人心を把握するための道具になるんだ、しかし一方でその文芸と宗教にかかわらせることによって、療養者にも社会性を持たせる、こういう意味あいが、文芸と宗教に持たされていただろうとおもいます。

この社会性という点は重要なところであって、予防法が生きているあいだでも、療養者たちは自分たちの発表した作品というのを外に向けてたくさん発信しています。あるいは、外で発行されている文芸誌等にもそうした作品を載せたり、自分たちの作品が一般の書籍として売られていたりということもあったわけで、この文芸というのが社会性を持っているというのは確かなところだとおもいます。

あるいは一方で、宗教をめぐってもその宗教の団体が慰安にくる慰問にくるということがあるわけで、そういう点でもその社会性を、宗教というものをきっかけにしながらつくっていったっていう面はあるだろうとおもいます。

で、ただ最近わたしの考えているところでは、単なる社会性や、その、人心把握のための道具として、これら文芸と宗教を考えるだけではなくて、むしろもっと一人ひとりの療養者が自己実現をしていく、そういうきっかけとしてこの文芸や宗教っていうのをとらえていくことはできないかというふうに考えています。

あとまあ、その、『閉ざされた島の昭和史』をみても、娯楽という観点は確かにあって、で、療養所のなかにどんな娯楽があったのか、そこでは、まあ、博打なども含まれるわけですが、そうしたものの、あるいは食べもののこと、あるいは、えー、しばしば、その、これも抑圧の1つとして批判されやすい患者作業、これもが1つの娯楽としてあったような側面がいろいろな記録、あるいは当事者の聞き書きからうかがえるところになるとおもいます。

ただ、その娯楽の観点っていうのが、いくつかはあるわけですけども、しかしさきほどいった1つのストーリー、抑圧と差別への抵抗と闘争の歴史というストーリーからはこうした娯楽の観点っていうのは省かれやすくなってるんだらうとおもいます。

で、こうした、その、療養者像、療養所像、1つのストーリーというのがいくらか変わる

きっかけになってきているのが最近あるのではないかとこのように考えています。で、そういう療養所像の転換のきっかけの1つというのが、まあ、ボランティア、あるいはいろいろな支援団体、啓発活動、こういったものがこのところいくらかのひろがりをもっておこわれているのではないかと、そしてそうしたきっかけとしてやはり、瀬戸内国際芸術祭というのの意義があっただろうとおもいます。これまで2回開催されているわけですが、これをとおして初めて島にきた、で、そのことをきっかけにしながらもう一度きてみようというようにひとたちが、いくらかは増えている、これは確かなことだろうとおもいます。

ただ、そのセトゲイのなかでも大島の位置というのは、全体のなかで比べてみるとまだまだ少ない、本当に桁違いに違うわけですね。ほかの、その、直島だとか小豆島が万単位できているとしても、大島のばあいにはせいぜい百人規模だったりもする、ただやはりその、島にいてみてこれは実感するところでもあるんですが、その、[官有船の]「せいしょう」や「まつかぜ」から30人、40人、まあきょうも多かったわけですがけれども、そのくらいの数のひとがまとまって降りてくるっていう光景は、やはりセトゲイまえはそんなに多くはなかったんじゃないかとおもいます。

で、セトゲイについてもわたしはいろいろ書いたわけですし、宮本〔結佳〕さんも書いているわけなんですけど、ま、あの問題点はあるけれども、えー、意義はあったというふうにひとまずいっておこうとおもいます。

で、えー、開かれた療養所、ということがいろんな機会にいろんなところでいわれるようになってきているわけですが、一方で将来構想をなかなか明確に描けなくなっているというところがある。で、国立の療養所13か所あるなかでは、おそらく大島だけだったとおもうんですが、将来構想を自治会が断念したというところがあります。まあ、奄美の和光園ももう数十人規模になって長く、あそこはもう自治活動すらが成りたたなくなっているわけなんですけど、えー、大島もその将来構想が描けなくなった、そうしたなかで一方で、高松市があらためて最近になって、これはおそらく、その、離島振興とかかわってのことなんでしょうけれども、将来構想にかかわろうとしているところがあるので、いったいどのよ

うに療養所を開くのか、あるいは活用するのかというところは、もっと十分に議論しなくてはいけないところだろうとおもいます。

で、こんなふうには療養所や療養者をめぐるようすを概観したり、そうした歴史の描き方をこうふりかえてみたときに、あらためて強調したいとおもうところは、やはり「閉ざされた」として療養所だけをみてしまうのは、それでは見落とすものが多いのではないかと、だからといって療養者たちは自由に出歩いたり、開放されていたんだなんていうことをもちろんいうつもりはないんですけれども、いったいどのようなつながりがあったのかということ、もっといねいにみていかななくてはならない、そうしたことを考える1つのきっかけとして、三宅官之治の墓前礼拝をとりあげてみたいとおもいます。

これはさきほどもいいましたように、今年の5月22日に初めておこなわれたわけです。で、霊交会の歴史をごくかんたんにふりかえてみますと、霊交会は5人の療養者が集まって1914年につくられた信徒団体になります。で、その5人のうちのひとりが、三宅官之治でありますし、それからもうひとりが長田穂波になります。で、その霊交会は1919年に機関紙の『霊交』を創刊します。初めは毛筆の手づくりで、8部あるいは10部つくったといわれています。それからエリクソンが寄贈した、えーその、謄写版を使っていわゆるガリ版刷りになる、それから活版印刷になるという変遷をとっている機関紙になります。

で、これ最大発行部数が1万部だったっていうんですね。これはなかなか部数でその部数をもろん島内だけで、あの、配り終えていたわけではないわけで、あのその、発行部数にもこの霊交会が機関紙をとおして外とつながっていたようすを知ることができるわけです。

で、その霊交会の、ま、記録というのは、えー、ま、大まかにいうと2つあります。1つは土谷勉というひとりが1949年に発行した『癪院創世』という本になります。と、またあとでおみせしようとおもいますけれども、あのこの、『癪院創世』を書いた土谷勉というのは、仏教徒で、霊交会の会員でもありません。ただ土谷さんは霊交会の石本俊市という代表とかなり親しくて、しかも三宅さんのことも知っている、長田穂波のことを知っている、で、

series 話トリエ 03

W-atelier03

土谷さんは石本さんが持っていた、長田穂波が書いた原稿を借り受けて、そしてそれをもとにあらたに書き直したのが『癪院創世』になります。もともとの原稿というのは長田穂波が三宅官之治の伝記を書く、そういうつもりで書き始めてまとめた原稿なんですけど、まとまったのが戦時下だということもあって発行できずにいた、で、それが眠ったままになっていたのを石本さんから聞いた土谷さんが、三宅さんのことだけではなくて、その、長田穂波のことも、それからエリクソンのことも書いてまとめようとして書き直したのが、この『癪院創世』になります。

少しこの、『癪院創世』がおもしろい、あるいは大いにおもしろいところがあるとして挙げるとすると、この木村武彦というのは、厚生省の役人なんです。土谷さんはもう 1 つ、あの一、著作をだしますけれども、それもやはり厚生省関係の団体から刊行されている。そういう点で、あの一、この土谷勉というのは、戦後になって軽快退所して横浜で暮らしたひとなんですけれども、非常におもしろい人物だとおもいます。活版の『青松』にもかなり、軽快退所した後も作品を書き続けているところがあるんですけど、ま、そういうひとがおそらく独特なつながりを厚生省と持っていたんでしょうけれども、そうしたつながりを活用して刊行したのがこの『癪院創世』になります。非常に印象の強い表紙の絵なんですけど、その表紙の絵もこの木村武彦というひとが描いたものになります。で、いろんな療養所の図書室にいくと必ずといっていいほどこれはあります。たぶん多くつくってたくさん配ったんでしょうけれども、あ、そんなふうには、まあ、よく知られたといってもいいとおもうんですけど、そういう本に霊交会のことが書いてあります。

ただこれは、霊交会の歴史というよりは、三宅と長田穂波を軸にした、大島におけるキリスト教伝道史というふうにとらえたほうがいいものだとおもいます。

それからつぎに、いまからちょうど 50 年まえ、1964 年に創立 50 年を記念して『霊交会』という小さなパンフレットをつくられています。これについても、1 つ知られていないことを挙げるとすると、えー、おとしになりますか、お亡くなりになった塔和子さん、彼女も霊交会会員で、この 50 年史のときには、編集委員の一人に名をつらねています。そして、

彼女自身の詩もこの『霊交会』という記念誌には掲載されています。

で、これらを見ると三宅さんが亡くなったあと、郷里に碑が建てられたというのは、書かれているわけです。しかし、どうもそのことが霊交会や大島のなかで代々語り継がれているというふうにはなっていなかったようですし、信徒さんがおっしゃっていたところでは、これは新聞にも掲載されていたんですが、読んでも信じられなかったというわけですね。つまり、それだけその、えー、当時においては、あるいはいまも、とっていいかもしれませんが、療養所で生きたひとたちが死後に郷里に、ふるさとに帰ることができない、塔さんの、あの、お骨も分骨されて郷里の徳島でご両親のお墓に、あの一、いっしょに眠られてるっていうのが、あの一、特筆されて新聞などでも報道されていますが、ま、塔さんが始まりでもなくて、いまからだいぶまえにやはりそうした例があった、しかもその当時は、予防法が生きている時代であったわけですし、しかも第二次世界大戦の戦時下、そうした時代に療養所で亡くなったもののお墓、骨がお骨が郷里に葬られるというのは非常に珍しいことだったろうとおもいます。

で、さきほどもいいましたように、この三宅官之治は霊交会の創設者のひとり、1877年に生まれて1943年に亡くなりました。で、彼が人徳のひとというふうに仰がれているようすは、この教会の外にあったあの碑にもあらわれているとおもいます。で、霊交会にとってああいうふうに石碑までつくって仰ぐべきひとというのは、三宅さんとエリクソンさん夫妻になる。で、そのことはとなりの図書室にもあらわれていて、えー、肖像写真というのが3枚だけあるんですが、それは、三宅さん、エリクソン夫妻この3枚になります。そういう意味で三宅さんはエリクソン夫妻とならんで霊交会にとって特別な人物、で、しかもその彼が仰がれる理由というのは非常に徳のあるひとだった、というわけです。

これもいろんな記録に書かれているところなんです、えー、三宅さんはとってもたいした人物なんです、しかしその信仰のキリスト教が玉に傷だというようないい方をされたりもする。あるいはいろんなもめごとが園内であると、三宅さんがでていくとそれがもう簡単にかたづいてしまう、そのように非常に人徳のあるひととして仰がれた、そういう

ふうに記録されている人物であります。

あるいは三宅さんが亡くなったときに、えー、当時の代表だった石本俊市さんが弔辞を述べるわけですが、そのなかでは聖者、非常にキリスト教の信仰に篤いひとだということも書いていて、当時の野島園長はその三宅さんを「聖者」というふうにまで呼んでいるわけです。

で、そうした会にとっても、あるいは大島にとっても特別な三宅さん。彼の人望というのは、あの一、いまでいえば自治会長にあたる役職を、数期にわたって務めたりというところにもあらわれているわけですが、そうした三宅さんではあるわけで、えー、しかもその、いま、大島にいるひとたちはもう三宅さんに直接会ったひとはだれもいないんですけども、しかし三宅さんのことは非常によく伝えられていて、知るひとは多い。おっさん、おっさんとよばれて親しまれていたひとだったということが、いまでも語り継がれています。

しかし、そのひとのそのお墓が郷里にあるということは、さきほどもいったように、記録のうえではあっても、大島の人の記憶からはだいぶ薄れている、忘れられているというところがありました。

で、そのことをあらためて確認したのは、この霊交会 100 年を記念して、ま、霊交会の歴史をこう書いているわけなんですけど、そうした調査の過程で岡山の赤磐市に、三宅官之治の顕彰碑がある、というのがインターネットでヒットしました。で、そこでは 2006 年にこの顕彰碑がつくられたんだということが記されているわけなんですけど、その写真には三宅さんのそのお墓とおもわれるようなものもいっしょに写っていました、で、わたしがその赤磐にあるということで、赤磐の郷土資料館に問い合わせをしたんですけど、こんなふうにインターネットでもでてくるくらいだから、地元ではよく知られた顕彰碑なのかとおもったんですけども、地元でもほとんど知られていない、で、その赤磐の郷土資料館の方も 4 日かけてようやくみつけたということでした。

で、その情報をいただいて、わたしと、その、わたしの研究グループのひとりである石居というのとふたりで、今年の 3 月に赤磐にでかけて行って、実際に碑をみてきました。

で、44年に、三宅さんが亡くなった翌年に建てられたお墓と、それから2006年に建てられた顕彰碑、これが2つならんでいる。で、これもまあその、写真をみると、おみせするとすぐに、あの一、おわかりいただけるところなんですけれども、そのお墓というのは、その土台が組まれたうえに墓石が置かれていて、しかもお父さんとお母さんの名まえも刻まれている、親子3人、1つのお墓のなかに葬られている。で、お墓のおもて面には、3人の名まえが、そして裏面にはそれぞれの没年月日が記されているというお墓になっていました。

で、さきほどもいいましたけれども、予防法体制下で、またしかも戦時下で、43年、44年という、まあ、なかなか厳しい時代において、その療養者が郷里にお墓を建てられたというのは、非常に珍しいことだったろうとおもいます。で、このお墓というのは、その、霊交会ともかかわりがあった、元職員の牧師、彼が、その分骨をしようとして、お骨を郷里に持っていったんですが、いってみると、その三宅さんの、お父さんとお母さんのお墓もだいぶ荒れはてている、それをみるに忍びなく、そのひとが尽力をして、地元でお金を集めて、このお墓を44年に建てたということです。

で、石は庵治石、ですからその庵治から岡山の赤磐まで持っていったんでしょうけれども、そして持っていくにはやはりお金もかかる、いろいろなひとの手助けもいる、そしてそのお金も地域の拠金で集めたというわけですから、やはりこの親子3人の碑が建てられるなかでも、いろいろなひとの手を経ておこなわれたんだろうとおもわれます。

ただそのときに、三宅官之治というのが大島に生きたひと、ハンセン病に罹っていたひとなんだということがどれだけわかっていたかは、えー、それを知る手だてがありません。さきほどもいいましたように、お墓の石には、名前とそれから没年月日、で没年月日のなかでも三宅官之治のところには、「帰」という文字が記されています。これは天に帰る、帰天の略なんだろうということ、それからおもての面の三宅官之治の名まえのうえには、「天使」と書かれています。そうしたところからは、このひとがクリスチャンだったということとはそれをみれば推察はできるわけですが、しかし大島に生きたひとだということはわか

らない、ようになっています。

で、幸いわたしは、この 2006 年に顕彰碑を建てたときの発起人のおひとりにも会うことができたんですが、えー、その方は、自分の何代まえが三宅官之治なのかはわからない、お母さんから聞いたことはなかった。えーっと、彼のお母さんがこの官之治の係累になるわけなんですけど、で、お母さんは嫁いでいるためにもう三宅姓を名乗っていないんですけども、で、この発起人のひとは、あるとき、えーどういうきっかけで手にしたかはもう覚えていないんですけども、その、『癩院創世』を読んだら、三宅官之治というのがでてきた、そして光木の生まれだ、光木というのが彼の地元になるわけですが、そこの生まれだということを知って驚いた。で、いろいろ調べてみたら自分の、まあ遠い先祖にあたるということで、あらためて 2006 年にこの顕彰碑をつくった、ということです。で、彼が小さいときには、その、お母さんからだけじゃなくて、ほかのひとからも三宅のことを聞いたことがなかった、ということをお話していました。

で、そういう点ではその地元でも、お墓が建てられるという非常に珍しい療養者だったわけですが、しかし彼のことは地元で伝えられていないということがあります。さきほどもいいましたように、そのお墓を建てるためには、えー、地元での拠金活動があって、それをもとにつくられたということなんですけど、しかし彼のひととなりや経歴というのは、十分に知られていなかった可能性があります。で、そうしたようすをあらためて、2006 年に顕彰する碑が建てられて、その顕彰碑には碑文に『癩院創世』からの抜粋などが記されているわけで、三宅がどういう人物だったか、地元でもようやくわかるように地元でもなったということがあります。でもさらにあらためていうと、いまではこの顕彰碑を訪れるひとまだいぶ少ないようで、さきほどもいいましたように、郷土資料館のひとが探そうとおもっても、地元のひとに聞いてもなかなかわからず、4 日もかかったというわけですから、もう顕彰碑そのものも忘れられた碑になっているということがいえるとおもいます。

しかしあらためてこうしたことを考えてみると、さきほどもいいましたように、その隔絶したところ、閉ざされていたところという療養所のイメージがあるわけですが、ほんの

かすかであれ、療養所は開いているところがあって、そうしたそのいわば隙間をとおり抜けて、療養所内外のつながりがあったというところは、こういうところからも確認できるだろうとおもいます。

そして、この 2014 年の 5 月 22 日の墓前礼拝のときには、その、地元のひとにもだいぶお世話になって、これは信徒さんたちが、われわれがいったあとに下見にいったわけなんです、そのときに知りあった方々が何人かいて、草を刈ってくださっていたり、あるいはあの一、歩くのに邪魔になるだろうとあって、筍もだいぶ抜いてくださっていて、その筍もごろごろ転がっていたんですが、そんなように小さなさやかなつながりかもしれませんが、地元のひとたちとの交流によって、こういう墓前礼拝が実現したというところもありますし、このときには一行が 17 人だったかとおもいます、医者もいましたし、看護師もいましたし、介護員、それから職員のひとたち、えー、それからわれわれ、それからこの顕彰碑が建立されたときに墓前礼拝をおこなった岡山の牧師夫妻もきてくださって、そうしたひとたちに囲まれて、この 22 日には墓前礼拝ができた。これもやはり、霊交会をめぐるいろいろなひとのつながりがあることとあっていいだろうとおもいます。

で、最後に、あつ、3 のところのタイトルのことっていいませんでした、この「はじまりのおわり」という言葉、これはえー、信徒さんのひとりだったとおもうんですが、彼が最初にいったことだろうとおもいます。で、その信徒さんも、あの一、この墓前礼拝は楽しみにしておられたようで、その直前には、あの、教会に歩いて登るというトレーニングをして足腰を鍛えるんだ、というようにしたうえで、あの、実際にいったわけですが、まあ、「はじまりのおわり」、霊交会にとってみると、その創設者の墓前礼拝というのはこれが初めてだったわけですが、信徒さんのひとりが 98 歳、ほかの信徒さんももう 80 歳代になっておられるところで、ご本人たちははっきりとはいっていませんでしたけれども、もう墓前礼拝はできないんだというふうにおもってらっしゃったのではないかと、そうしたところが、この「はじまりのおわり」という言葉にあらわれているようにおもいます。

で、「おわりに」のところ、終末期に求められる作業と施策というのを書いたんですが、

series 話トリ工 03*W-atelier03*

この終末期という言葉自体は、べつに最近になっていわれるようになったわけではなくて、曾我野一美さんなんかは、もう 1980 年代くらいから、あの、よく書いておられました。そういう記録がいまもみることができます。

でも、あらためてきょうの礼拝は、牧師と信徒さんわたしと 4 人しかいなかったわけで、いま霊交会の会員は 6 人になってしまったわけなんですけど、礼拝にでられるのがもうふたりだけになってしまった。ひとりはいま、あの、入院されているわけですし、ひとりはこのあいだちょっと怪我をして歩けないようすになっていて、教会まであがってこられない。で、ひとりはこのところこの終末期という言葉をよく使うようになってきているようにみえるんですが、こういう時期にあらためて、その部外者であり外部者であるわれわれになにができるのか、ということをもとめてみたのがここになります。

やはりこれは史料の整理と公開をすすめていかななくてはならないだろうとおもっています。で、これはまあ、文書、もんじょの史料であるとかあるいは図書そのものもそうですし、あるいは写真、具体的な造物^{もの}といったもの、そういったものも含めてこれらを整理し公開していくことが、非常に緊急の課題になっているだろうとおもいます。そして、これは当事者ではなかなかできないというところがあります。1 つひとつ目録をつくる、リストをつくる、あるいは保存に耐えうるように、その写真や文書などをデジタル化する作業なんていうこともなかなかできません。で、そういうのはそれをできるわれわれがやはり代行する必要があるだろうとおもっています。

それから、つぎの生活史と交流史の再編というのは、えー、くりかえしになりますが、療養所、療養者をめぐるストーリーというのはやはり 1 つの型がしかも強固にあって、それが、「抑圧と差別への抵抗と闘争の歴史」という 1 つの型だといっているとおもいます。で、それだけではやはり療養者のごくかぎられた面しかみない。さきほどの『朝日新聞』の記事もそうですが、負の歴史、負の遺産、あるいは負の記憶というふうにしてしまっただけは、より多様であった療養者の生活、あるいは療養所をめぐる外との交流といったものが、そこからはこぼれ落ちてしまう、落としてしまうということになるだろうとおもいます。

series 話トリ工 03

W-atelier03

あるいは、療養者の、療養所に生きたひとたちの歴史を負、マイナスなんだ、とだけ切り取ってしまったのは、そこに生きたひとたちの喜びも楽しみもなんにもなかったかのようにみえてしまう。もちろん、苦しい生活があったことはまちがいないわけですが、しかしそうしたなかにもあった、いろいろな楽しさや喜びといったものをもっととりあげる必要があるだろうとおもっています。

それから島のガイドなんですけど、これもまあ、セトゲイのときのこえび隊を始めとして、あの一、いろんな団体が島のガイドをおこなっているっていうのが、あらためてわかるわけですが、えー、やはりこれは、できるだけきちんと記録にもとづいたガイドをおこなうという必要があるだろうとおもっています。で、そういう点で、史料の整理と公開ともかわるわけですが、できるだけ、その、島に残っている史料を、えー、みやすくする、というのがわたしたちの仕事だとおもっていますし、そういう作業をとおして、島の適切なガイドができるような、えーまあ、準備をする、用意をするというのもわたしたちの活動に必要なだろうとおもって、ま、島で仕事を続けているところです。

というのが、きょう用意したおおよその内容になります。で、あのちょっと長く話しすぎましたけれども、できるだけこのシリーズは、その、集まったひとと話しをする、ディスカッションする機会にしたいとおもっていますので、そういう点では堅苦しくなく、あの一、制約もなく、自由にいろんなことを話したいとおもっています。

【出】 ありがとうございます。お疲れさまでした。

【あ】 墓前礼拝には、宮本さんもいったわけですが、どうでしたか、いってみて。

【宮】 でもやっぱりそのいくまでの過程というものをとおして、その過去というものであったり、自分たちがいまいる場所をつくってきた方が、どういう方だったのかということに対する関心が、本当にいまのメンバーにとってすごく大事ものなんだなっていうのをあらためて感じました。普段明示的にあんまり示されることはないんですけども、そういう機会を設けることの重要さっていうのは、やっぱりこう実際に礼拝をおこなってみないとわからなかったっていうことと、あとはやっぱり、顕彰碑にかかわられた方もまたき

series 話トリエ 03

W-atelier03

くださるっていうことは、そこにこうかかわる、なんていうんですかね、ひとは多様だ
っていうことが、まああそこについて初めてわかった気がしました。

【あ】 そのさきほど、あの一、発起人のひとりにお会いしたっていうことをいいま
たけれども、いまその方は大阪にお住まいで、その方ももう 90 になろうとしている方なん
ですね。で、まあそれでもだいぶ、その、足腰はしっかりと、お話もしっかりとして
いらっしゃったんですが、ただやっぱりもうだいぶ忘れられているような部分も多くて、
どういうきっかけでその『癩院創世』を手にしたのかというのは覚えていらっしゃらな
かったんですね。であとその一、小さいときに、その一、三宅官之治のことなんかを聞か
なかったのかということを探ねたときに、おそらく当時は箒口令があったんだろうという
ようなことをいって、こう、口のチャックを閉めるしぐさをしたわけですね。いまからふり
かえればということであるんでしょうけれども、やはりその、予防法の時代には、え一、
自分の先祖に、親戚にそういう療養者がいたんだっていうことはなかなか地元でもい
づらい、いえないようなところがあった、ということなんだろうとおもうんですね。

【出】 1つお尋ねしてもいいですか。はい。あの一、ぼくは、その一、墓前礼拝を
実現されたということに対してはまあ非常に、あの、すごいなど、こうお話をお聞きして
もらったんですが、あの一、いま箒口令の話もありましたけど、1944年のまだあの終戦に
近づいているような状況で行方がみえないときに、その、訪ねられた牧師の方が、ま
わりの方に働きかけて、募金を募ってっていうことをおっしゃったんですが、その
ときのことを覚えておられる方々はいらっしゃったんですか。その募金を実際募った
ときに、あの、例えば募金に協力したひとたちの名簿があるとかそういうのは、も
うまったくわからない。

【あ】 えっと、しっかり調査をしたわけではないんですけども、あの一、ない
ですね。

【出】 その、三宅官之治さんのお父さん、お母さんは、官之治さんよりも当然
さきに逝かれていて、で、官之治さん自身は、お父さん、お母さんのお墓をつ
くるときには、それは官之治さんの力でまえのお墓はつくられたんですか。

【あ】 いやー、そうじゃないだろうとおもいます。

【出】 あの、お身内の方がいらっしゃって、お身内の方がご両親、官之治さん自身はなにか自分の記録のなかに、えー、その自分の両親、お父さん、お母さんが一気に、あるいは時間差をおいてかわかりませんが、亡くなっただろう、で、そういう知らせを受けての自分の気持ちみたいなのを記されてはいますか。

【あ】 三宅さんの書いたものは『霊交』と『藻汐草』にしかないといっているとおもうんですけども、『霊交』には三宅さんしばしば、あの、記事を書いているんですが、しかもそのなかにお母さんのことを書いているのが多いんです。ただ、それは亡くなった直後にこういう知らせを受けた、というのではなくて、しばらく経ってから、その、お母さんのことをふりかえるってことはしばしば書いています。

で、三宅さんはもともと、えー、郷里をでて、あの一、熊本の療養所にいたんですけども、あの一、私立のほうの、で、大島に療養所ができるっていうのを聞いて、お母さんの近くにいきたい、お母さんが、あの、面会にくるような場所にいきたいということで、わざわざ熊本からこっちに移ったという経緯があるんですね。

で、お母さんはどうも何度かは、あの一、大島にもきていたようなんですが、亡くなるときには三宅さんはいけなくて、ただ三宅さんの、えー、三宅さんは大島に入るときに、えー、妻子を離縁してるんですが、その残してきた娘さんがお母さんを看取ったというふうに書いていたとおもいます。ただ、その娘さんもその後、えーっと、救世軍に入ったらしいという記録はあるんですが、どうなったかわからないですね。

【出】 その一、もしですね。その一、募金に対してその応じた方々が、まあどういう気持ちでその募金に応じたのか、それはその三宅さんのお父さん、お母さんと官之治さんのその家族が抱えた、その離縁までするような状況を知ったうえで、あの一、近所のひとたちがそれに応じているのか、それともそういうことを十分こう知らずに、まあその応じたのか、そのへんがね、もし明らかにされていくと、ひょっとしたらその地域のひとたちの、あの戦前のそういうような状況でのあり方っていうのがね、しっかりみえてくるんじ

やないかなとおもうんですけど。

【あ】 1つわかっているのは、その地元で募金活動をしたときに、えー、その地元のひととして役割を果たしたひとに、いま名まえは忘れちゃったんですが、助産婦さんがいて、その方は全国規模で名まえの知られている社会福祉家なんですね。でー、どうもその彼女の尽力が、その、お金を集めるうえではだいぶ働いたんじゃないかというのが推測になります。

【出】 なるほど、それは身内ではないということですね。まあハンセン病の方と、いろいろこう、ぼくも鹿児島島の鹿屋が島〔比呂志〕さんが長かったので、そちらのほうへ 2、3回ちょっと行きまして、で、島さんのことを知るひとにお話をいろいろ聞いたり、まあ島さん、いろいろなことを自分のことも文章に書かれていて、まあそういうのをこう読んでりしてると、まあどうしても身内であればあるほど、なかなかあのお父さんやお母さんが生きていうちはいいんですよ、あの一、まだあの一、その、家族としての、あの一、絆がそこにはこうみえてくるんですけど、お父さん、お母さん亡くなる。そうするととたんに、まあ豹変したように、まあその島さんについても、弟さんとか妹さんのお兄さんに対しての思いっていうのが、自分はいいいんだけど、だけれども子どもたちのことを考えるとやっぱりこう差別されるのはいやだ、という思いが強くて、でー、結局まあ島さん自身は、奥さんがあの療養所のなかではいっしょにいたんですけども、あの病者ではなかったんで、でーあの一、ときどき高齢になられるお母さんが、まあ昭和 60 年代の初めに亡くなられますが、まあそのもう何度かは鹿児島までこられたようですけども、そのもう倒れたときに、まああの〔聴取不可〕あの子がいけないから自分行けないから妻に行ってきてくれっていう、ま、いくんですよ。そうすると、その一、書けない、もう文字も書けない明治生まれのひとです、そのひとが本当に仮名文字だけで、広告の裏に書いたような手紙をこうまた送ってきて、で、あのまた会いたっていうようなこと、で、あの〔聴取不可〕会いたい、きよこ会いたっていうことを送っている手紙もちょっとあの読んでりしてるとですけども、結局お母さん亡くなったときも、島さん自身はふるさとへは

series 話トリ工 03

W-atelier03

もう帰ってません。で、今後は奥さんが社会復帰したときに、小倉でききに亡くなられたときに、弟さん、妹さんは小倉まできてるんですが、島さんが亡くなられたときはふたりともこなかったようですね。そういうこと。だからあの一、現在においてもやっぱりこう地域におけるこう差別のまなざしを気にしたり、強かったりするところは、なかなかやっぱりそのお墓を建てることさえ非常に厳しかったと、まして戦前の話ですから、そういう状況のなかで、そういうことが成しえたということは、ぼくはまあ非常に当時のあの村社会的なところが残ってるようなところだったら、まずありえなかっただろうとおもいます。あの島さんとかかわりをもって養女にまでなった方が、あの一、2010年に、まあ一、あの、久しぶりに観音寺いくからっていうんで、観音寺の職員の知ってる方に、島さんのことをやっぱりもっと職員に知ってほしいからって行って、特別な緊急の講演をもちかけるんです。しようとして、そうすると島さん子どももちろんいませんから、で、それは市の職員対象の講演なんですけど、その講演をする直前になって、どういうわけか、その小倉にいるひとさんのところに、もうそんなことはしないでくれ、こないでくれっていう電話が入り、でもそのひとは私は絶対やるから、市からも許可を得て〔聴取不可〕ということは市の職員のなかに、そうした、あのまあ遠縁にあたる方がおそらくいらっしゃってでないかわかりませんよね。一般のひとに。

【宮】 しないでくれという電話をかけてくるのは、だれがかけてくる。

【出】 その市の職員としか考えられないじゃないですか。だって市の職員対象の案内だから、一般の市民に対してはなにも案内してないものですからね。あのネットワークのなかで案内されたものに対する反応なんですよ。で、あの一、そんなことあったからどうしようかってぼくも相談を受けましたが、いややりましょう、ぼく手伝いますよってことで、市の担当者のひとも是非やってくれっていうことでやったんですね。そうすると、今度はまた別の方から終わったあとに電話がかかってきて、で、いや一あの名誉の回復をさせていただいてありがとうございました、と。私はそんなこと全然知らなかった、と。あの一、自分の父や母からもそんなことは聞かされてなかったし、ということでおそらくは

series 話トリエ 03*W-atelier03*

なんらかの形で血のつながりが、何代か前まで遡るとあるような方が、市の職員のなかには当然いらっしゃって、そのなかで、非常に明確な 2 つの反応がみえてきたんです。だからその、いまだにそういったひとたちは、まあ、さきほど、まあ、歴史博物館の職員の話をしてました。私も実はそこにおいて、あのときはぼくが誘ったんですよ、実は。あの一、まだいったことないって言うから、ぼく自身ももう後追いで、あの、2008 年ここにきたのが初めてだってさっき申しあげましたが、それまではもう、香川県っていてもほとんど無知で無関心ですよ。で、そういう状態があるのと、もう 1 つは誤った認識がやっぱり先行して地域にはあった。いまだにそういう状況がまかりとおっている部分はありますから、だからあの、官之治さんのお墓がそうやって故郷にあって、遺骨が帰れて、で、しかもそれがまあ長い間はもう忘れ去られたようになっていたけども、そのなかのやっぱり身内の方が、やっぱり自分の身内のことをもうちょっとしっかりのちの世に伝えたということで、新しい碑まで建てて、またこういう新しい交流がうまれていくって言うことは、あの身内のなかから起こってくるやり方としては、まあときどきあの、入所者がやっぱりふるさとに帰れたりとかね、群馬の、いろんなそういう話も聞こえてきてますが、まああのやっぱり少しずつまあ、氷が解けるように、あの誤解を乗り越えていこうというような、あの一、気持ちがあるんだろうと。ぼく自身は高校の教員でして、まあそういうような、あの一、もし、なんで聞いたかっていうと、そういうふうな地域性があるんだったら、そらおんなじようにやっぱり観音寺の片田舎、市民の意識ももっともっと変えていけるんじゃないかというふうにおもってますから。で、あのホームルームの長い 2 時間続きのやつで、まあうちの生徒たちはちょうどぼくが「観一」へもどってくるまえから、島さん亡くなった、あの、2003 年の 6 月からずっとそのドキュメンタリーみて、ずーとあの、ハンセン病のこと学ぶということをはじめて、ぼくは 2 年遅れて入るんです。そういう状況があのありますんで、あの一まあ、かといってぼくらは身内のひとのそういうふうな複雑な思いをけなすことはまったくできないし、非難することはできない、っていうのは、なにがそのひとたちをそうやって武装させているのかっていうと、ぼくら不特定多数の、やっぱり

series 話トリ工 03*W-atelier03*

こう得体のしれないものたちが、どういう反応をしてくるかわからないっていう思いが、だいたい強いからだとおもうんですね。だから学校現場でぼくがいまできることは、そうやって生徒たちに正しく知ってもらおう。それからできれば島さんとはもう直接ふれあうことはもう、亡くなっているのでできませんから、だから島さんに最初ゆかりのあるひとが大島のなかにいないかなあということで、で、最初にまあ入所者の方が、本当に島さんのお母さんの実家と、そのひとのもともとの実家があの三豊市のエリアだったので、それであの家族ぐるみでよく知ってましたから、そのひとのところを訪ねてまあ3、4年はきたんです。ところが、そのひとが最近ちょっといまダウンして病棟に入ったままで、きょうもおそらく人工透析をされてるとおもいますが、そういう状況になってしまったから、だからそれで今度だれにお願いしようかとおもって、いまはある入所者、こう川柳とか短歌とかやっぱり文芸で、あの、そのひとがよくいうのは、『青松』にね、もう書くのはもう入所者のなかではもうだれも書かなくなって、で、盲人会のひとたちも、もうあの過去に発表したようなものをこう、だしてきたりとかっていうなかからピックアップしてのことだから、もう書いているのは私だけや、ゆうて。私がやめたら、阿部先生とかやっぱり外部のひとがいまは、あの文章を書かれているけど、島のなかで書くひとはもうおらんようになったんや、ということをやっぱり言われて、で、まあそんなまあ、入所者とちょっとふれあうということで、ぼくらは一般のやっぱりこうガイドをしてもらうっていうのではなくて、ガイド自身はぼくでもできますし、あの福祉課の方にガイドはお願いしてまあ納骨堂のなかに勝手に入ったりできませんから、まあそういうところも含めていろいろぼくも補足をしながらガイドをして、で、お医者さんにそのハンセン病の病理ことをお話ししていただいて、午前中過ぎたあと、午後、あの今度入所者のひとたちとふれあいをつくろうということで、で、入所者とはみんなが川柳を考えていって、そのひとの好きな川柳とお互い交換したりとか。で、もちろんそういうなかで、そのひとが子どもをあの7か月で昭和30年代に、あの、随さなければいけなかったっていうような体験を語っていただいたり、っていうような本当のふれあいを、ぼくは、まあ、つくりたいなあということで、毎年ち

series 話トリ工 03

W-atelier03

よっと事前のうちあわせできたりしてやっています。で、信徒さんも、あの一、ぼくが最初知っていったのは写真ですね。そのひと随分こうパンフレットとかそんなのに、あの一、すごい雄大な自然とか本当に生き物の命をみつめるような写真撮られてて、そういうところで、ああこういう写真撮るひとと一回会ってみたいな、で、そしたら、あの、解剖台だとかそういうの有名になりまして、まあいろんな映像にも登場しはじめましたから。で、そのひとにちょっとふれあうことできないかなあとおもって、で、それで訪ねたら、いいよ、で、そんな話を持ち込まれていこうとしたのがちょうどそのミュージアムのたちがいったことないという状況だったんで、で、まあちょっと誘ったりはしたんですけどね。で、そのひとも、いろんなこう、軽快退所して、東京のほうで電気の仕事なんかされてっいうことも、あの一、ぼくが聞いて、まあ対話形式で話したあと、まあ、去年、まあ、初めてだったので、ここでそういう話をさせていただいて、で、まあ、生徒たちが、あの、島さんのために最後作曲オルガニストの方が、小倉の方がした曲を、コーラス部の生徒たちがお礼にお贈りする、というようなことで、そこのオルガンを足踏みのオルガンを使わしていただいて、で、その伴奏でここで讃美歌のような歌をちょっとさしあげました。で、そのあと、あの今年写真部の生徒にちょっと声をかけて、で写真という観点からまあ、そんなにたくさん的人数ではないですけど、生徒ふたりと先生ふたりと入所者と、あの一、一般の生徒にはちょっとお話をさせていただいたあと、ぼくらはその後半はべつの入所者と交流するんですが、まあその生徒たちはちょっと残って、入所者と写真についてこうお互い語りあえるような場ができないかなと、というような形で、たいていのあの学校とかはもうだいたい9時に着いてそのあと1時の、だいたい半日くらいでもう帰ってしまうんですよ。でも、ぼくらはもう香川県も西の端のいちばん果てのほうですから、まあ生徒たちくるときはいっしょに電車できますけど、それでもまあ1時間10分、20分ぐらいかかりますので、だからせっかくきたんだったらもう半日で帰るのもったいない、やっぱりその後半のその交流、ふれあいの部分で、まあしっかりみてもらう。そうすると生徒たちの感想みてるとね、あの一、まああの一、希望者だけなんですけどね、希望をとってこうくるんですけど、

series 話トリエ 03

W-atelier03

まあ自分のおじいちゃん、おばあちゃんと同じような世代、まああるいはそのうえのひとたちで、まあ、結構いろんなこう被差別の体験も話をしてくれますけど、そういうものを完全に乗り越えて、いま、こう非常に、こうたくましく明るく、こうあの、語ってくれて、それでもいきいきと生きているっていうこと自体に、まあ、すごい感動すると。すごいなと、私が同じ立場だったら、そんなことはなかなかおもえない。もうあれだけひどい、あの例えば、ね、妊娠7か月で昭和30年代というと、本当にもう殺人に等しいとおもいますが、そういうことがまかりとおって、で、ホルマリン漬けにされて、で、データがわかってないからということで、まあお母さん生きているにもかかわらず、だれの子とかかわらないから、もうあるのもつらいし、ま、自治会にもお話聞いたら、みんなで手厚く火葬して、で、あのー、水子の碑をっていうのを建ててるわけですが、そんなそのー、いまだったら、で、当時やっぱり外の、あのー、世界でいたら、当然そんなことは絶対できなかったはずだ、そういうことが園内でおこなわれていたっていう事実、それと、まあ自分、特に女子の生徒が結構きますから、自分もやがて子どもを産むかもしれない。まあ、そういうことを考えたとき、入所者は、まあ、その話をするときにはやっぱりちょっと深刻になって、まあ、泣きながら話をされますけど。まあ、そのあとはまた元の笑顔に戻って明るく話をされる。まあその落差というか、そういうものにやっぱりこうなんか超越したりとか、やっぱり一般のおじいちゃん、おばあちゃんもそれぞれのドラマがあるんだろうけども、それ以上に事実としてのなんか生活がみえてくる、というようなことをみえてきて、やっぱりいつまでも元気でいてほしいなとおもうんですよ。もう、ひとりの入所者もやっぱりいま寝たきりになって、流動食と透析の毎日ですけれども、でもやっぱり生きていてほしいし、まあ、ぼくらは会いにきて、こっちにきたら、あの、きょうきてますよってことをお伝えしたりってことで、できるときはするんですけどね。ぼくがそういう思いになったのは、やっぱり自分が知らなかったということが原点です。もう全く知らなかった。あの、さきほどおっしゃったように香川県のひとも全然知りません。本当にまだまだ知りません。むしろ、後追いで、いま、あの、この10年ぐらいで、あの、学んできた子どもたち

series 話トリ工 03*W-atelier03*

のほうで、むしろよく知ってます。ぼくら同世代の同窓生たちも、あの一、いろいろよびかけるんですよ、保護者もいっしょにいきませんかというふうによびかけますけど、まあ平日なので、なかなかお仕事あるとこれないですけどね。でもまあ、なかにときどき、多いときはまあ3、4人加わったり、先生方はね、やっぱり大島きたことないから、っていうひとはまだまだやっぱり多くって、で、まあ、ぼくなんかが、こう、転勤しないうちに、是非いっしょにいきたいっていうんで、先生方はもうこっちから呼びかけなくても、毎年4、5人ぐらいは、今年日程があうからいきたいなというようなことをいってくれて。で、今年もぼく入れて8人、生徒は15人ぐらいですけど、8人きます。なかには、あの、いままでもう3回、4回きた先生もいるし、で一、初めてのひともいるし、で一、生徒たちのなかにもまあコーラス部の生徒とかもくりかえしきてるんですけど、まあ、いやでないか、っていうふうに聞いたら、いや一、今年も元気であるかっていうことだけでもみたい、いうふうにいってきますね。だから、あの一まあ、阿部先生たちはそうやってこうしっかり史料を残していこうとされる、で一、まあそれをあのぼくらはまた使わしていただいて、そのなかから新しい発見、掘り出しをして、それを、ぼくは、まあ、あの、学校現場というところで、あの一、子どもたちに返し、また、あの、今年香川市の職員研修で、7月の終わりから8月の初めに300人ぐらいと、あの一、職員を3回に分けて、あの、1時間ずつの、ちょっと人権の話をしてくれっていうふうにいわれているんで、まあ、ぼくにきたっていうことは、あっ、これはもう天国のいる島さんが、是非おれのことをいってくれというふうに頼んでいるんだろうと、そのメッセージだろうとおもって、ぼくは島さんの話とそしてやっぱり大島の話を中心にしますよっていうことで、まあ、了解をもらって、ただ差別の構造とかがっていうのはやっぱり同和問題とかほかの人権課題ともやっぱり共通する部分があって、もちろんそういうなんでぼくがハンセン病の問題にこだわって、そういうふうにかかわっていかうとしたのかっていうその心の動きも含めて、まあしっかり島さんのことを今度は市のひとに伝えようかなと、で、ひよっとすると、その電話をかけてきたようなひとたちが、ぼくにもアプローチをしてくるかもしれないので、もしそうなっ

series 話トリエ 03

W-atelier03

たらね、あのチャンスだとぼくはおもいます。もう負のイメージを持った方がきても、まあ逆にありがとうっていうふうにしてくれた方がきても、そこでまた新しいつながりができます。負のイメージを持ったひとには、まあそんなに心配せずともいいんじゃないですかっていうことが、もしね、乗り越えてお話、むこうが立場を明かしてくれたら、こちらからアプローチできるんで、そんなことをやるのが、ぼくの使命だなとおもっていまはやってます。だから、いちばん気になるのはそこですね。その地域のひとたちが三宅さんのそのお墓をつくらうとしたときに、どういう気持ちで、どういう、あの、あれで、お金を出していったのか、でー、今回ちょっともうどんどんお参りするひとがいなくて荒れ果てていたのが、またこう光を当てられました。あの一、やっぱりなかなかね、遺骨は帰れてないんですね。島さん自身も、その小倉のほうにほとんどの遺骨はあって、でも納骨堂には、私は出ていきたいというふうにいったほうだから、島比呂志は納骨堂には*でやっぱり、療養所のなかで死んで納骨堂にお骨がいるかっていうことだけはいわれたくないから、意地でも私は社会復帰するっていうふうに外へでたんですね。で、お仲間のひとたちとか、まあ大島の島さんを知っているひとたちも、療養所のなかにいたらもっと長生きしたのになあっていうふうなこともいわれるんですが、島さんはやっぱり自分が死を迎えるにあたっては、絶対にでていきたいというふうに運動して、国賠訴訟にもかかわってますから、だから絶対に外へということで、小倉と、で、富士山麓の小山町というところに、あの、「文学者の墓」っていうのがあるんですが、そこに奥さんといっしょに、こう、遺骨の一部をいれてもらっているのと、ふるさとはその養女になった方が、もともとの菩提寺に、もうお墓もないんですよ、だからまあ共同の十三重の塔の下にこう遺骨をいれて、お位牌だけをあのお寺さんに預かってもらっています。だからぼくもお位牌をだしてもらって、命日の3月22日に近いときに、いつもそのお寺に、まあ何人か集まって、まあ親戚のひとなんかはどうなっているか、ぼくらはもう全然知りませんから、だから、やろうと。来年13回忌迎えて、まあもし13回忌にそのまだみなさんほとんど知らない大島の時代の島さんの作品とかが、まあきたひとにこうお渡しできればね、もう簡易な印刷でも結構で

series 話トリ工 03*W-atelier03*

すから、そんなのができればなあというのが、いまぼくがおもっていることです。すみません長々と。だからまあ、灯台下暗しといいますが、ほんとにね香川県のひとつたちは、ここに島がありながら、ぼくはほんとうに塔さんの存在で、大島のことをだいぶん、こう、あの一、聞きおよんではいたんですが、もう高松にずーっと 7 年間、その博物館時代も勤めましたけど、そのときも大島のことなんかは展示では 1 回もとりあげてないです。いまもし博物館にいたら、ぼくは積極的に、逆に大島のことをとりあげるとおもいますが、もういま博物館離れてますから、そんな〔聴取不可〕しようとはおもわないし、まあ、近現代を研究している、まあ、学芸員もいたので、で、いったことないんだったら 1 回いっしょにいかない？っていうふうになったら、いきたい、いきたいっていうから、で、誘って、で、まあぼくはもう阿部先生には、あのそのときはもうごあいさつする時間はなかったので、生徒たち引率してきてますから、だからまあそのあと、入所者とちょっとお話ししたりしてっていう具合ですね。だから、香川県の歴史、あの山川なんかがだしている「歴史散歩」のシリーズも、今回、まあ、ぼくも執筆のなかで観音寺のことを書くメンバーに加わってたんですけど、もともと日本史の教員ですから、だからそういうことを書くことはできたんですが、まあ、そっちの担当でもなかったし、で一、あの、それを書くことで、まあ、興味本位の形で大島へこうくるひが増えると、やっぱりちょっとそれはそれで困るなあというのは、おんなじような思いですよ、やっぱり。入所者のひとにしてみても、もう、あの一、よく学校でもいわれるんですよ、その一、是非入所者のひとに学校にきてもらって話をみんなで聞くこと、生徒全員で聞くことはできないのかっていうふうに、まあ管理職なんかにもいわれるんですが、やあ、ぼくはもうよくよばないと。もしほんとうに聞きたかったらせめて大島まで行って、全員は無理だろうから。だからそれはぼくはやろうとおもいません。そういうことを積極的にやろうとはおもいません。よぶことはもう恐れ多いと。だけれども、あのぼくらが出向いて行って、そこで本当の意味でふれあってもらって、で、そういうひとたちが、ああ観音寺の子どもたちがきてくれて、で、あんな歌聞かしてくれたなあとか、こんな川柳読んだなあ、まあ、あの、入所者のひとは、短

冊にね、お礼のまた川柳書くと短冊にこう書いて、これ今度書いたから書いたひとにまたあげてねっていうふうに、**あっそうですか**、いってくださいですよ。だから、そういうふれあいがあると、あの一、その入所者の方たちも、もう人生のほんとうに終末期だとおもいますが、ああ一、島でもこういうことができたなあっていうことをおもって、まああの、ね、いて、心に留めてくれたらいちばんありがたいなあと、**それもね、つながりのあり方のひとつですよ**ね。そうです。そうです。そんなことをぼくは。だからとっても気になりますね。この時代のこの官之治さんの赤磐のほうの地元の方が、どんなことを考えて、どういう思いでこうお墓を建設されたか。

【あ】　　でも、たとえばいまの時代だったら、その、塔さんのいわばお骨の里帰りともう大々的に報道されて、**されてました**ね。しかも碑も2つ建てられているようなんですが、そのいまのようすはどういうふうにお考えになりますか。なんで地元のひとたちはあんなに塔さんを歓迎するのか。

【出】　　おそらく塔さんの実績だともおもいますね。ぼくはそれがものすごく大きいとおもう。あの塔さんをめぐるやっぱりまわりの認知度とか、まあ、それ知るというだけじゃなくて、塔さんがどんな思いでいたかっていうことは、やっぱりそこがあの方のやっぱりパーソナリティと文学の力というのがものすごく大きいとおもうんですね。で、あの一島さんもおなじように活動はやっぱりされてますし、『火山地帯』という雑誌のなかには、まあおなじ思いがあって、機関誌があるのに、わざわざ機関誌とは別に自分の独自のやっぱり文学誌をたちあげるってことで、それは島さん自身がこう書いてるんですけど、あの機関誌は中がやっぱりいちばんの対象だと、いまの『青松』のように外からの投稿というのはもうほとんどない時代ですから、島さんはむしろ全国に会員を募って、で、編集をするのは療養所のなかの人間がやるけれども、そこを乗り越えていく、そうすることで、自分は手紙のやりとりで外の世界とつながっていける、ぼくにとってはやっぱり書くこと、そうやって文学誌をつくるのが外の世界とつながっていく、ある意味当時としては唯一のことというふうに。

series 話トリ工 03

W-atelier03

【あ】 でも、塔さんのばあいには、地元がどう考えていたのかっていうのは、いまいちばん知りやすい例になるんだらうとおもうんですが、その塔さんの実績っていうのは、それはなんですか。

【出】 実績ですか。

【あ】 ええ。

【出】 実績っていうのはおそらく、あのハンセン病者かそうでないか、もちろんハンセン病者ってことが大きいとおもうんですけども、その詩にこめられていた、詩にこめられていたいろんなメッセージ、人間としてのメッセージがやっぱりいちばん、万人のやっぱり心を打つのではないかなとおもいますね。だからぼくの知ってるもうほとんど、あの一、文学なんかにはまったく興味もないような、あの一、年配の友達の方がいますけど、塔さんの名前全然知らなかったひとが、あの一、塔さんの死の知らせが報道されて、で、その詩の一節が載せられたら、おまえ一あのひとの詩集持つとんか、いや一塔さんの詩集随分たくさんでて、あの自分自身は文庫本になってるものしか一冊持ってないと、他の全部はぼくは塔さんの研究してるわけではないので、読みつくしたことはない、その一冊だけでもいいから、おれ読んでみたいけん、貸してくれんか、っていうふうにいわれて、ああそれだったらあの文庫ででてるから、またあげますよ、ってことであげたんですね。まったくハンセン病に興味のないような人間が、そのまあ報道の力かどうかは知りませんが、それで、まあその一篇の詩を読んであの「かかわらなければ」の詩ですけども、それ読んで、もっと他の詩を読んでみたいと、で、そこからそれが糸口になってそのハンセン病のね、ことに興味を持ってくるっていうことになれば、それはそれでやっぱり塔さんの残したものが大きいんだらうなおもうんですね。

【あ】 塔さんの詩は、たとえば学校、香川県内の学校教育で使うとか、その一、使われたり、読まれたりしているんですか。

【出】 いまね、いちばん盛んにやっているのは、善通寺の東中学がものすごく盛んにやっていますね。で、おそらくその先生のやっぱり存在が大きいとおもうんですけども、

だからあのぼくも、あの、一度展示、普通寺であった展示はみにいきましたが、その子どもたちはあの島の案内みたいなものもときどきボランティアで、瀬戸芸のときもちょっときてたみたいですし、で、まあそれこそ『朝日』がよく報道はしてますよ。普通寺東のとりくみを。

【あ】 それは、そこくらいって考えたほうがいいですか。そこを代表とするくらいにって考えたほうがいいんですか。

【出】 いまはね、あの中学校向けのあのパンフレットを県の薬務感染課がつくって、で、そのなかにあの入所者の方の手記、さっきの入所者の手記もはいつてますし、で、塔さんのその「かかわらなければ」の詩と何篇かはいっしょにいて、で、配布はしてます。で、あの一、それは要求すれば、まあ無償で、県がお金かけてやってることだから、あのまあ、学校から要望すればですけれども、いきます。で、ここんところみてた観音寺のエリアは、あの比較的まああの例えばうちの学校に入ってくる以前に、その大島の、その塔さんの詩なんかを読んで入ってくるひと結構います。だから、いつとき 10 年前から比べるとずっとやっぱりそういうふうなこう裾野は少しずつですけど広がって、〔信徒さん入室〕

ああ、こんにちは、ありがとうございます。お邪魔してます。

【信徒】 ようこそ。

【出】 ありがとうございます。もうせっかく、はい、阿部先生も、あの一、ぼくは話しするのは初めてなんで。

【信徒】 ああそうですか、どうぞどうぞ。

【出】 はい、ゆっくりあの、はい、お話聞けるならどうぞ。でもね、まだまだ。やっぱりまだまだですね、あの一、遅いですよ。ゆっくりしている。

【あ】 いやー、わたしは塔さんについて書かれたものいくつか読んだけど、あの、どれだけ塔さんの作品読んでんだらうって気になって、作品のことなんにも論じないんですよ。**ああ。**それで塔さんだけ持ちあげて、ものすごく不思議な感じがしましたけどね。

【出】 うん、うん、確かにね。

【あ】 [信徒さんに]、いまからふりかえてみて、あの、墓前礼拝はあらためてどうでしたか。

【信徒】 いや、あれは一あの、私にとっては、結局、私の霊交会への踏ん切りがやはり三宅さんだったということがありましたから、これはもう私の、なんちゅうんですが、人生やはりはっきりさせたと、位置を変えたというような意味もありますから、あれはもういい思いに、まああの一、機会が得られたなというふうにおもいました。

【あ】 場所はどんなイメージでしたか。

【信徒】 場所はやっぱりあの山奥。**山奥ですか。うん**、やっぱりあの一、いま、あの一般にいわれとる里山というような感じとはちょっと違う。**もっと山ですか。**うん。**中国山地に分け入って。**はい、あの一、やはり古い時代の、樺のなかに入っていくような感じが、まあ三宅さん自身が古いひとだからそういう思いを持つ、持ったんかもわかりませんが、ふりかえてみたら、やっぱりあの一、ひとの、なんちゅうんですか、あの原点にはみなあるとおもいますわね。人類の原点、ということもあるでしょうけれども、その過程の 1 つだっておなじ原点だろうという意味で、三宅さんの存在は、やはりあの一、現実に三宅さんと向きあって生活したこともないし、話を聞いたこともないし、けれどあの本をみてやっぱり驚きがありましたし、こういう生き方もあるということに、ちょっとやっぱり感心させられましたね。私がやはり生きるいちばん心棒のようなものをいれてくれたかなというような、そんな感じがありますね。

【あ】 あの、お墓自体の印象はどうでしたか。

【信徒】 あの一、お墓、やはりあの、あんな形のお墓をみたのは初めて。

【出】 3人が連名ということですか。

【信徒】 でなくって、あの土台が、形そのものが、もう全然、私たちの子どものころのお墓のイメージってほしいもう四角形か、

【出】 そうですね。**ええ一。**まあある程度、基壇があつてまえかわきに、こう、あの、とりはずして、その墓石の下んところに空洞があつて、**そうそうそうそう**、骨壺いれるっ

ていう、**そうそうそうそう**、感じですよ。

【信徒】　　そういうイメージしか持ってなかったですから、あのお墓をみて、これは少しやっぱり違うなど。まあ、あの形をだれが考えられたか、聞いてみたいなどおもうぐらいですね。

【あ】　　そうですね。あれー、宮内〔岩太郎〕さんなのか。まあ碑の文字自体は宮内さんだったようですけどね。

【信徒】　　はーはーはーはー。形は、ああいう形のお墓ってあるんですか。

【あ】　　ううんと、なくはないですけど、でも少なくともあの地域ではあれ 1 個だけでしたからね。

【信徒】　　たぶんそうだろうとおもいます。

【出】　　キリスト教の様式というわけでもない。

【信徒】　　ないですね。もう全然違う感じがありましたから。

【出】　　三宅さんの遺骨は納骨堂にも収まっているんですか。

【信徒】　　いやーそれーが、あーっと、いちばん最初の、初めの納骨堂に入っておられるかどうか、そこらはもう、まったく。

【出】　　わかりませんか。

【信徒】　　はい、昭和 18 年ですから、もうすでに、あの鎮魂の碑の、こっちにある南無仏がありますけれども、あの一、納骨堂、最初の納骨堂へ入るまでに亡くなった方の、**もう全部一緒に、遺骨を全部、一緒にしてますよね、うん、いっしょにしていますから。はい。**ひょっとしたそのなかに、**加わっている、かな**というような。

【出】　　いや、ぼくはその今回あの神〔美知宏〕さんがね、あの一、ずっともう東京での生活が長かったから、自分のまあ第二のふるさとと考えているこの大島に散骨〔分骨〕をね、してほしいってというようなことで、さっき入所者とくる道々も、あの一、船で会ったんで、そんな話をちょっとしてたんですけども。まあ、島のその方からこう愛された方だったら、なおさら、まあ自分のふるさとへもだろうけれども、ここでみんなでいっし

よにね、**あの一**—**そうですね**。みんなといっしょに眠りたいというようなことだったろうと。

【信徒】 あの一、たぶん霊交会に根拠をおいて生活した時代がありましたから、まあ大島自体がもうもちろん根拠ですからね、そこの帰るという意味があつて、たぶん散骨を考えられたんだろうと、私もそうおもってますから。ただあの大島からまあ全療協の仕事で、東京のほうに移られたときに、あの一、最初はおそらく、あの一、秋津教会をうかがったはずです。

【出】 ああ、そうですか。

【信徒】 と、私はそうおもっています。

【出】 霊交会の。

【信徒】 はい、あの一、霊交会からでていかれたえっと山田さんだったっけ、名まえが思い出せませんが、やはり青木恵哉さんとおなじように、あの霊交会から福音伝道のために各地にひろがっていくという傾向がありましたから、そのために、山田さん、ちょっとはっきり思い出せませんが、とにかく私たちが若いころ、神さんのおったころにその秋津教会にいった霊交会の先輩にあたる方が、あの一、里帰りという形で大島にしばらく、どのくらい、1か月もいなかったかもわかりませんが、奥さんといっしょに里帰りされたということがありましたんで。だからあの一、霊交会と秋津教会につながりはあつたはず、というふうに私はおもってます。で、神さんも当然そのことを知っているはずだし、あの一、初めは秋津教会とつながりを持っていったのかなという思いがありましたけれど、仕事上多忙で、おそらく教会どころでないわってという形になっただろうと。

【出】 でしょうねえ。**ええ**。

【あ】 脇林さん、話もどしますと。あの一、赤磐の猫のおばあさんとか、あの一、草刈りをしてくれたご夫婦だとか、そのひとたちの印象はどうでしたか。

【信徒】 印象はもうねえ、あの一、やっぱり私の子どものころの時代の、田舎の善人、そんな感じですよ。「おひとよし」。非常になつかしい感じを私は持ちましたね。**ん一**。まったくあの一、どこそこから、だれがきたとかいうことを越えて、ひとをみてすぐそばに近

series 話トリ工 03

W-atelier03

寄ってきて、こちらから尋ねたらすぐこたえてくれるし、目的がわかったら、どうしましょう、こうしましょうと、すすんで、自分から案内しますっていうようなことをおっしゃって、そこらをみたらいまのひと、現代のひととの、あの一、まあ、かかわりあい方が、昔のひととのかかわり方の違いがあるんだなあというふうにはおもいましたね。んー。非常にあの一、すうーっとと、そのひとの心のなかに溶け込んでいけそうな感じ。んー、んー、まったく壁がないという感じの思いをしましたね。

【あ】 われわれが 2 月いったときは、猫のおばあさんとはあんまり話せなかったんですけどね。

【出】 猫を抱いてくるんですか。

【信徒】 まあ、私たちも時間的なこともありましたから、何時までに帰らんにゃいかんということがあって、詳しく話をつつこんで聞こうというところまではいきませんでしたけれども、とにかくあの写真をみしたことによって、態度がごろっと変わりました。あー。喜ばれて、だれそれにこれはすぐにみしてやらんといかんわ、とかなんとか、あーそうですか。おっしゃってました。三宅さん、

【あ】 それは、肖像写真ですか。

【信徒】 あの一、そうです。あの顕彰碑の。

【あ】 顕彰碑の写真ですか。うん。ふーん。

【信徒】 ときの写真と、それから、あの一、べつに私どもの写真、あの三宅さん、靈交会の写真だったかなあ。ふーん。まあ、かかわりのある写真を持っててみしたら、驚いてましたがね、ええ。まさか三宅さんのことで、古い馴染みのあるひとたちがくるとはおもっておられなかっただろうということもあって。

【出】 あの一むしろその歓迎をしますというサインが、ああ、そうですねえ、ありふれて、充ち溢れていたっていう。

【信徒】 そうですね。そんな感じはありましたね。こちらが、あの一、驚くほど、予想した、以上に、面がありましたから、これはもう全然違うっていうような感じがありま

した。

【出】 やっぱり、その地域が持つ、やっぱりそういう、雰囲気があるんですかねえ。

【信徒】 まああの一、家はあの墓のしたでなくって、あの一、途中で猫のおばあちゃんの方へいく道の通りの途中にありました。その途中には、三宅さんの新しい墓があったじゃないですか。たぶん、あの一あれ一、写真、記念写真撮っておられた牧師ほか何名でしたか。そんなかの方の写真だなということだけは、はっきりわかる。新しいの 2 基 2 つならんでありましたね。おそらく去年かおととしぐらいに建ったかなというようなそんな新しいやつだなあ。まあ、ある意味で心のなごむ、おちつく場所っというような感覚がありました。これは私が、私自身育った土地に一度帰ったことはありますけれど、**おお一**、それにもなかったような感じ、**んん一**、があったということですね。

【出】 育った土地の方へ帰られて、その一、気持ちはそんなにおちつかなかったんですか。やっぱりそのとき。

【信徒】 家のほうですか。

【出】 はいはい、生まれ故郷。

【信徒】 家のほうはね、あの一、帰ったときには、あの一から何番め、3番めかの兄貴がいましたけれども、それがまああのえ一と、まあ、家を一度みて帰ったらいいわということで、車を走らせて、寄ってみましたけれどもね、え一、まるで、よそのどっかへ入っていくような感じ。

【出】 ふるさとではない気がしたんですか。

【信徒】 ない、感じ、はい。**それに比べて**、それだけじゃなくして、あのふるさと全体をみどころという気持ちがあって、タクシーに頼んで、**いろんなところ**、一応村をずーっとまわってみしてくれて、ずーっとみてまわってましたね。まるっきり変わってる。ふるさとがないなあというような感じすら受けた。**面影がもう**。山川、山川だけです。ただし、川も昔の石垣で積んだ川とは違って、**コンクリートの**、コンクリートで固められた川でしょ。田んぼがない。昔たくさんあった田んぼがまるっきりない。もうあの残って面影

があるといえば山だけだな。で、海岸にいつてみるが、昔潮干狩りとかなんとか、まあ泳ぎにいつたりとか、遊びに海にいつたりとかいうことで海岸あたりずーっとしょっちゅう子どものおきにはいつてましたけれども、昔の様相はまったくない、埋め立てられてましたね。

【出】 ああ、海岸線も全然変わってました。

【信徒】 全然変わってました。あの一、産業廃棄物ですか、あの原っぱになってましたね、私たちが貝とりにいつたり、タコとりにいつたり、**浅かったところ**、ううん、湾口が、大きな湾口があったんですが、湾口なんてどこにあるかもさっぱりわからない。**もう全部地面になってしまっ**て、もう埋め立てられてあつて、ただ草が少し生えていた程度、なんで草が生えるんですか、つていうて運転手に聞いたら、これ廃棄物いっばいつまつてるよつて、産業廃棄物がつて、**よくないつていうこと**、うん、そういうことおつしやいました。

【出】 それに比べて、その官之治さんのお墓を訪ねたおきは、ものすごくつかしく、

【信徒】 あの、ひとに会つたことによる、**ひとですか**、関係があるとおもいますね。人柄が昔の感覚の村のひとたち、まあ近くのひとたちとのかかわりあいのなかでも、人間関係で感ずる感覚はありますわ。**はあ一**。帰つたおきには、だれひとり見覚えのあるひとがいない、**いない**、知つたひとがいない。

【出】 身内であつてもやっぱり。

【信徒】 身内ももう連絡はありませんから、何十年経つてるんですよ。全くわからないという状況がありますね。そんな背景があつたせいかもわからない。私はもう二度とふるさとへ帰ろうなんて、そんなみなさん、ロマンチックな考え方持つてないよ、つてな気持ち。

【出】 なるほど。**ええ**。

【信徒】 それが続いた、つて、ふるさとに帰りたくて帰つたひとつていうのは、幸せだなあつとおもいますね。

【出】 まあねえ、たいてい迎えてくれないですからね。

【信徒】 そうですね。私の本当のふるさとっという感じがしない。

【出】 入所者のひとりもいってました。もうお父さん、お母さんのお墓は島根につくったけども、お寺さんの敷地につくったけど、私はそこにははいらない。私はもうここだと。みんなと、

【あ】 大島はどういう感じになりますか。

【信徒】 あのねえ、いま私の感覚で言えば、もちろん大島でなくっても、どこでもいわけですが、けれども、この大地の一画にまた帰れるっというそれだけで十分だろうという気持ちがあるから、神さんみたいに、あのまあ散骨もよろしいだろうし、幅広く考えることができます。もちろん納骨堂に入ってもそれでもいいし、という、なんの違和感もない、というふうにおもってます。

【あ】 ふるさとっということていうと大島はどうなるんですか。

【信徒】 大島、ま、現在私はこの大島にいますからね、まあ、私のいる場所は最高の場所だと、には考えてます。ああ、そんな関係があって、人間どこだっこの宇宙のどこかにみないんじゃないんですか、そのいる場所で幸せでなくっちゃあどこいったって幸せなんてないよって、ああどこでもあれ、住まうところがあって、まあ自分の住まうところが最高の場所だ、それで十分だろうとそうおもってます。

だから、写真撮るにしてもおんなじことです。大島のことを撮れば十分だと。無理にどこかへ行っていい景色を撮ってっというようなそんな考えはありません。あの、プロがきて、しきりに誘いますが、**ふっふっふっふ。外にいきませんかってことですか、**うん、あそこいけばすごい写真撮れるよとかなんとかいうようなことをいいますから、私はそれは少しおかしいんじゃないか。自分が生きてる場所がどこかということがわからなくっちゃあ、本当の喜び人生はありえんだろうと、いうふうな思い、考え方になってます。その点では、だからプロのひとがこられて、どこかへ行っていっしょに撮りましょうかとかいうようなことをいう方がいます、いますけれど、私は大島で十分だと。大島のそれがみすば

らしいとおもわれるようなこと、景色とか風景とかものとか、いろんなものがあるでしょうけれど、それはそのひとの見方しだいですし、そのひと自身の考えで決まるもんだらうとおもってますから。

写真がいま私は大島にいるんだから、この大島が世界でいちばんいいと、あるいは地球、宇宙のど真ん中かにいるよということをいえることはない。それは地球の果てだよといわれても、まあそれはどんな表現もできますわね。

【出】 ま、いちばんでもぼくなんか気になるのは、納骨堂の行く末ですね。これがやっぱり気になりますね。

【信徒】 まあ、ふつう大島のひとが一般的にみな考えてるのは、納骨堂で、まあいれてもらえればもうそれでいいということ、たいがいのひとがみないっとるようでありますな。

【出】 まあ、あのなかにはほんとに 2100 を超えるね、戦前のも含めたり、子どもたちを含めるともっと多いかもしれませんけど、そういう遺骨があそこに眠っていて、で、それがこのあとこう、今お仲間のひとたちがね、朝晩、**そうですね**、お参りにいったり、いろんなかたちで手をあわせている。そういうことがこう途絶えてしまうとね、どうなっていくんだろうと、そのためにはぼくらがなにができるんだろうなおもったりもしますけど。

【信徒】 ん、まあ、あの大島を訪ねてこられるばあい、外部からこられるひとは、ひとそれぞれでやっぱり考えかたを持ってこられるでしょうからね、それはそれでいいんでしょうけれども。まあ私からみるばあいには、あの一やはり、一般、今のひとの生活感覚でいえば、いろんな選択肢があって、そこにいていろんなことをいっしょにやれてってというようなことを考えたりするんでしょうから。あらまあ、あの一、そういうふうな考え方自身を変えられたいちばん大きな動機みたいなもの、出発点みたいなものはやはり三宅さんだなというふうに私自身はおもってます。三宅さんの生き方で、ほぼいい尽くされるかなというふうに私も納得しましたんで。

series 話トリ工 03

W-atelier03

【あ】 穂波さんはたくさん文章を残しましたが、それにくらべると三宅さんも石本さんも文章はそんなにたくさん書いていないわけですね。

【信徒】 そうですね。

【あ】 でも、このふたりは、あの、自分自身のやったことの影響かっていうのは、とても強いものがあるとおもいますねえ。

【信徒】 あの一、それは言葉でないものを持っておられたっていうことだとおもうんだよ。おそらくあの影響力という感じでいえば、大島ではあのひと、石本さんもそうですけれども、三宅さんも多いと考えるかなというふうにおもいますね。それで霊交会の連中が、あの一、三宅さんの影響をみな受けています。

【宮】 それは直接会ったことがないひとも含めて。

【信徒】 そうですね、会ったことのないひとも含め、もちろんいっしょに生活した連中から始まって、あの一、まあ三宅さんのことを語るばあいには、ほぼみなそんなに大きな変わりはないみたいでしたね。まず、でんとした信頼感をみんな持っているなど。これは、あの、だれひとり変わってなかったというのは、私がまあ霊交会の求道生活の過程で、いたからかどうかそんなことは関係ないとおもいますが、人間的な魅力というんですかね、これはだれにも伝わっているとおもわざるを得ないようなひとだなと。本に書かれたからどうというんじゃないけれども、実際に生きていたひとが、あの一、およぼした、あの一、ひとのかかわり方のなかにおよぼした影響っていうのは、これは計り知れないものがあるんだなあというふうに私はおもってます。まあ、あの一、三宅さんのあの本をみよったらほぼ納得いきます。

ちょっとそうね、いまのひとでいえば、なにかいろんなことをやるやないですか、競技ををやってもなにをやっても、おれがいちばんという状況に置かれたら、万歳をやるし、吹聴はやるし、それをひろめることでいっぱいになっているというようなことがあるとおもうんですわ。そういうまあ現代のひとの生き方、私自身は批判的な目でみてますけれども、あの一、随分やっぱあの一、生き方がどんどん変わってきているなという感じもあ

るし、むしろ古い昔のひとを訪ねたほうが、日本人、まあ未来を託す子どもたちに教育になるんじゃないかあと、そういうことはありますね。

【出】 だから三宅さんの影響力の大きさっていうのはね、ぼくはあの島さんの作品読んでても、あの一、島さん自身はキリスト教徒にはなってないんですよ。

【信徒】 そうですね。

【出】 うん、まったくキリスト教とはゆかりもないような生活をしていて、あの一、それこそさっき娯楽の話もでてましたが、あの鹿屋でパチンコ台を自分でつくってね、仲間といっしょにパチンコで遊んだりとかね、そんなこともやってるわけですよ。で、そういうなかで、ところがあのひとが自分がその「文学者の墓」に刻む代表作を一作だけ刻んでくれるんですけど、それ何を選ぶかっていうと、「海の砂」っていうあの作品を自分の代表作だと、あの世の中は割と「奇妙な国」っていうその療養所のなかを風刺した、作品、初期の作品をだすんですけど、いや自分は晩年の「海の砂」を刻んでほしいと。その「海の砂」っていうのが「ヨブ記」のなかの一節ですよ。はいはいはいはい。で、その最後に、その「ヨブ記」の「海の砂」がでてる部分をいちばん最後に引用して、その作品を閉じてるんですね。だからそういうことを考えたときに、あの〔聴取不可〕の中にでてくる、自分が大島にきてこの霊交教会へ何回となくこう通いながらの一年間、っていうのが、入信はしなかったけれども、やっぱりその三宅さんの影響力が、それが作品のなかにね、こう染み込んでいって、そういうような「ヨブ記」の一節が、まあひとつの代表作に選んでほしいという発言になったのではないかなというふうにおもいますね。

【あ】 島さん自身は、その、三宅さんのことを書いてるんですか。

【出】 少しだけですね。ぼくもまだ、あの一、あまりにも発刊されている雑誌の量が多すぎて、全部はみれないのと、あの一、県立図書館にはないんですよ。ほとんどもう島さんは同人に対して全部送ってますが、あの一、なかなか読めないんです。で、あの一、何作品かはぼくも雑誌をいただいたりはしましたが、あの一、島さんが自分でかつて社会復帰したあとに、あの一、いくつか送ってそこからあとのバックナンバーも療養所のなか

の雑誌ではなくなってしまったので、まったく別人、もう同人のメンバーもどんどんどん
どん変わってますし。

【宮】 追うのがかなり難しい。

【出】 はい、でも、あの一、星塚の敬愛園とその鹿屋の図書館へいけば、その島さん
が主宰していたころの作品全部残ってるんですよ。

【あ】 で、その少ない記述でも島さんが三宅さんから影響を受けたっていうのはわか
るような文章なんですか。

【出】 わかります。はい、それはわかります。また今度、先生あの、もしあれだった
ら、メールにスキャンしてお届けします。ただね、そのときにおもしろいのは 1 点だけね
え、ここへ通っていたはずなのに、あの、信徒さんにまえもいいましたが、ステンドグラ
スが云々っていうのがでてくるんですよ。**はいはい**。だからね、そこがね、その一、この
霊交会はどちらかっていうと、ね、あの新教系でそういうのないじゃないですか。**そうで
すね**。だから南の方の、**カトリック**、カトリックとちょっと誤解をされてるんだらうと、
でも、名まえはこちらの方の名まえがでてくる、名まえはね。

【信徒】 あの、実際の島さんと私、会ったこと記憶がないんですわ。ただ名まえだけ
は覚えております。**ああ一**。文芸作家だということで、名まえだけは聞いていましたから。
まあ、霊交会のなかでも島さんのことを知っている方は、かなりいたようにおもいますね。
ええ。実際には子どものときに、少年、まあ、小さいときに大島に入られたんですかね。

【出】 えーっとね、さっきも申し上げたんですけれども、だいたいもうあのはたち過
ぎくらいのときに 1 回ですね、**は一は一は一**、17 年から 18 年、そのあいだいった分で 1
回と、22 年から 23 年と、**は一は一は一**、だから信徒さんとはたいていすれちがっている
とおもうんです、戦後のときは。

【信徒】 あの一、名まえだけは頻繁に聞くんです。**はい**。歌人会に私いったことがあ
りますから。歌人会の連中が島さんの話をしていることも知っているし、ほかで、まあ、
文芸雑誌みたいなものを『青松』をとおしてもそう、だれかから島さんの話を聞いたり、

ということはあっただけで、実際にあの対面したということはなかったですね。

【出】 島さん最近読んでるともう最初のうちはやっぱり島さんももう自分の身を隠すほうに終始してますから、**はあ一**、でもやがてあの自分の教え子に、自分は生きてるからって小説をどんどん書き始めたころに、大きく変わったんですね。で、そこからもう仲間たちの人間回復ということで、らい病法の廃止に必死になってかかわってはいきますよね。だからあの方の人生をみつめていると、そういうふうなこうやっぱりひとりのハンセン病にこう悩んだ方が、どういうふうにかこう変わっていくっていうのもやっぱりみえてきます。

【信徒】 は一は一は一は一、なるほど。

【出】 で、最近、あの一、去年発見したあの一と、**はいはいはいはい**。あの方ともうひとりやっぱり同郷の香川県の西のほうの大野原っていうところがありますけど、**ほ一**、この方がぼくがすごいなあとおもったのは、あの一、目のみえない、途中で失明してしまう入所者の方で、盲人会の会長もされてて、『私はここに生きた』に随分文章を書かれてるんですが、

【信徒】 そのひとはそうですね。

【出】 そうそうそう。であの、入所者と、ね、**そうです**、再婚されて、奥さんのほうは、**歌のほうで活躍されて**。そうです、その入所者があのやはり大野原っていても、五郷っていういちばん山奥のほうですが、そちらのご出身で、で、そのひとがね、やっぱり歌を詠むひとで、自分よりも少し下のその入所者の存在を知って、昭和 43 年からずーとここへ通いはじめるんですよ。

【信徒】 ほ一、そのことを私は気がつかなかった。

【出】 で、そのひとがあの一歌を詠まれる、奥さんも歌を詠まれる、自分も歌を詠むということで、で、最終的に昭和 48 年に、あの一、お墓に、さっきの三宅さんではありませんが、歌碑を建立する。そのひとが呼びかけて、ふるさとに帰ってこれないからということで、

【あ】 予定していた時間が過ぎましたので、ここで終わりにします。

講演会終了後、霊交荘に移って、出席者全員での団欒となった。



7月26日から29日まで大島で調査をおこなうなかで、いくつかの驚きがあった。

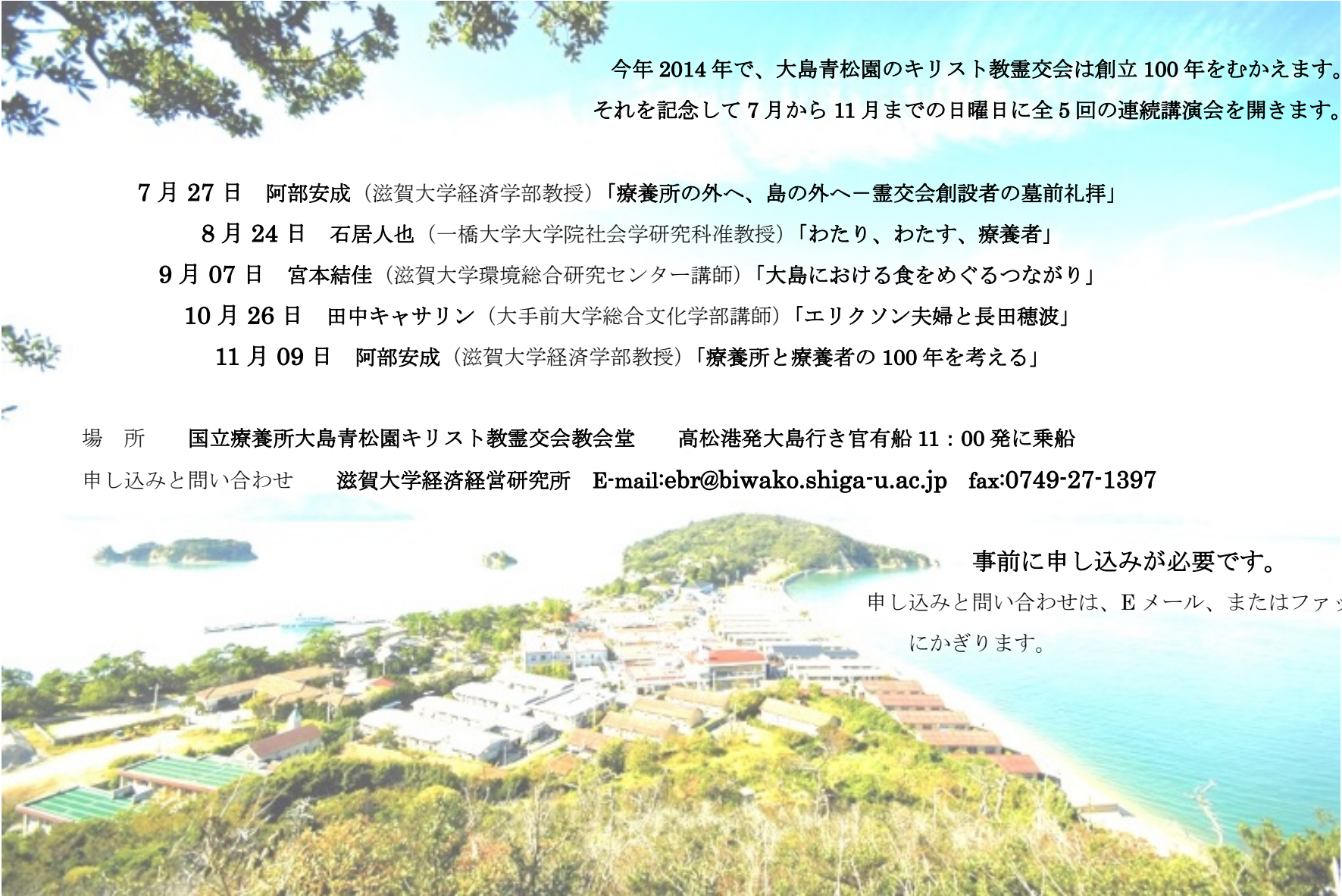
まず、霊交荘の荒れぐあい。わたしの滞在まえに、キリスト教の学生団体が利用したとのこと。冷蔵庫には飲みかけのカルピスが入ったペットボトルが1本、キッチンの床にはドレッシングボトルから剥がされたパッキング、ガスレンジの元栓は開いたまま、洋室の床にテープのり、いたるところに長い髪の毛、そして電気炊飯ジャーのなかは残ったご飯としゃもじが入ったまま、お手洗いの汚物入れも満杯。これまでもお風呂の洗い場が砂だらけになっていたり（そのときの霊交荘備えつけのノートには、子どもと海水浴をたのしんだようすが記されてあった）、歯ブラシを入れたままコップが和室の人形ケースのうえにおいてあったこともあった。それらとくらべても今回はひどかった。霊交荘はホテルではない。

7月28日昼11時15分の定時放送での、「今週の行事予定表からのお知らせ」。日毎の「施設見学」がアナウンスされる。28日月曜日は、高知県健康対策課30名、29日火曜日は、高松市立の小学校20名、養護学校15名、香川県立の学校10名、計45名、30日水曜日は、高松市立の中学校30名、同小学校20名、計50名、31日木曜日は、人権活動団体50名、徳島県立の学校20名、計70名、1日金曜日は、愛媛県の子ども会30名、香川経済同友会20名、計50名、この1週間で総計245名もの来訪者が予定されているという。そのたびに自治会や福祉室が対応するのだろう。自治会事務所に掲げられているホワイトボードにも、来訪予定の団体名がびっしりと記されていた。

現地で、当事者から話を聞くことにより知り得ること、わかることがあると理解できるが、それにしても異様な数だとおもう。それぞれの団体は、これほどの来訪者があると知っているのだろうか。

今年2014年は、土用の丑の日は7月29日だった。この日の園の夕食に鰻の蒲焼がでると献立のアナウンスにあった。園内食堂では、うな丼850円。

国立療養所大島青松園 キリスト教霊交会 創立 100 周年記念 連続講演会 ◇ 2014 年 7 月～11 月



今年 2014 年で、大島青松園のキリスト教霊交会は創立 100 年をむかえます。
それを記念して 7 月から 11 月までの日曜日に全 5 回の連続講演会を開きます。

7 月 27 日 阿部安成（滋賀大学経済学部教授）「療養所の外へ、島の外へー霊交会創設者の墓前礼拝」

8 月 24 日 石居人也（一橋大学大学院社会学研究科准教授）「わたり、わたす、療養者」

9 月 07 日 宮本結佳（滋賀大学環境総合研究センター講師）「大島における食をめぐるつながり」

10 月 26 日 田中キャサリン（大手前大学総合文化学部講師）「エリクソン夫婦と長田穂波」

11 月 09 日 阿部安成（滋賀大学経済学部教授）「療養所と療養者の 100 年を考える」

場 所 国立療養所大島青松園キリスト教霊交会教会堂 高松港発大島行き官有船 11:00 発に乗船

申し込みと問い合わせ 滋賀大学経済経営研究所 E-mail: ebr@biwako.shiga-u.ac.jp fax: 0749-27-1397

事前に申し込みが必要です。

申し込みと問い合わせは、Eメール、またはファックス
にかぎります。

国立療養所大島青松園は、香川県高松市庵治町にあるハンセン病をめぐる国立療養所です。大島への往来は、高松港から官有船に乗ります。
講演会では、30分～40分くらいの講演と、30分～40分くらいのディスカッションをおこないます。時間によっては、島内の案内もします。

責任者□阿部安成

申し込み-----■かならず事前に、滋賀大学経済経営研究所（業務時間は月曜から金曜までの9：00～17：00）に、Eメール（ebr@biwako.shiga-u.ac.jp）か、ファックス（0749-27-1397）で申し込んでください。電話や郵便での申し込みは受け付けません。

■申し込みは各回ごとに必要です。

■Eメールのばあいは、件名に「霊交会講演会出席」と入力し、ファックスのばあいは、「霊交会講演会出席」と明示してください。どちらのばあいも、かならず、①氏名、②連絡先、③出席する講演会の日付、を明示してください。質問があるばあいは、それを記入してかまいません。

■連絡先の個人情報は、本講演会の連絡以外には使用しません。

■日程、講演者、演題が変更となるかもしれません。それに備えて、希望する連絡方法（Eメールまたはファックス）を記してください。無記入のばあいは、EメールにはEメール、ファックスにはファックスで連絡をします。

■申込者にはかならず、Eメールまたはファックスで返信をします。申し込みのEメールまたはファックスの送信から72時間が過ぎても返信がないばあいは、通信事故の恐れがありますので、再度申し込みをしてください。

■申し込みはかならず、講演日前々日の金曜日16：00までにしてください。それ以降の申し込みには対応できません。

■いったん申し込んだのちにキャンセルをするばあいは、その連絡は不要です。

大島への移動■高松港の第一浮棧橋3番乗り場から出ている大島行の官有船（無料）に乗船してください。高松港乗船場から会場までは、わたしたちが誘導します。

■船は11：00に出航します。遅刻したばあいは、つぎの便が13：55高松発となるため、講演会には、間に合いません。

■帰りは大島発13：25の船に乗る予定です。大島の滞在時間は、およそ2時間となります。

■高松での宿泊や、高松港までの経路については、必要に応じて、各自で手配や確認をしてください。

島での飲食—■お昼ごはんを食べる時間はあります。ただし、食べもの、飲みものは、大島に渡るまえに、各自で用意してください。大島では飲食物の提供ができません。空きペットボトルなどのゴミは、かならず持ち帰ってください。

暑さ寒さ-----■防暑のための帽子や日傘、防寒のための衣類などは、かならず各自で用意してください。会場には冷房暖房のエアコンがあります。ただし、教会堂内は一般家庭のように快適な空間ではありません。

録音録画-----■講演会会場では記録を残すために、録音と録画をします。ただし、出席者が特定できるような公開はしません。

療養所の外へ、島の外へ◇◇◇◇◇阿部安成

はじめに——大島青松園を知るための記録

療養所の記念誌 創立25周年から100周年まで記念誌7冊

自治会の史誌 大島青松園入園者自治会編『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大

島青松園入園者自治会五十年史』大島青松園入園者自治会(協和会)、1981年

盲人会の史誌 大島青松園盲人会編『わたしはここに生きた—国立療養所大島青松園盲人会五十年史』大島青松園盲人会、1984年

聞き取り 「聞き書き・それぞれの自分史」『青松』第50巻第4号通巻第487号、1993年5月～同誌第60巻第5号通巻第588号(2003年6月)、香川県健康福祉部薬務感染症対策課編『島に生きて—ハンセン病療養所入所者が語る』上・下、香川県健康福祉部薬務感染症対策課、2003年、など

史料集 阿部安成監修、解説『報知大島』リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ1、近現代資料刊行会、2012年、同前『藻汐草』同シリーズ2、同前、2014年

1. 隔絶の閉ざされた療養所

隔離予防法体制の桎梏(1909年～1996年) 予防法廃止、違憲国家賠償請求訴訟

抑圧と差別への抵抗と闘争の歴史

文芸と宗教 慰安と人心把握と社会性、娯楽の観点(『閉ざされた島の昭和史』)

2. 療養所像の転換

ボランティア、支援、啓発活動のひろがり

瀬戸内国際芸術祭の開幕(2010年、2013年)

開かれた療養所へ 困難な将来構想

3. 「始まりの終り」という体験

5人の療養者が1914年霊交会創立、1919年機関紙『霊交』創刊

霊交会の記録 土谷勉『癡院創世』木村武彦、1949年、笠居誠一ほか編『霊交会創立五十周年記念誌』大島青松園霊交会、1964年

創設者のひとり三宅官之治(1877年～1943年) 仁徳のひと、「聖者」のひと、仰望のひと

郷里にある父母子碑(1944年)と顕彰碑(2006年)

初めての墓前礼拝(2014年5月22日)

おわりに——「終末期」にもとめられる作業と思索

史料の整理と公開 文書、図書、写真、造物

生活史と交流史の再編

島のガイド